第１章　大学生の農林業・農山村体験から見る農林業・農山村の価値

田中 淳志

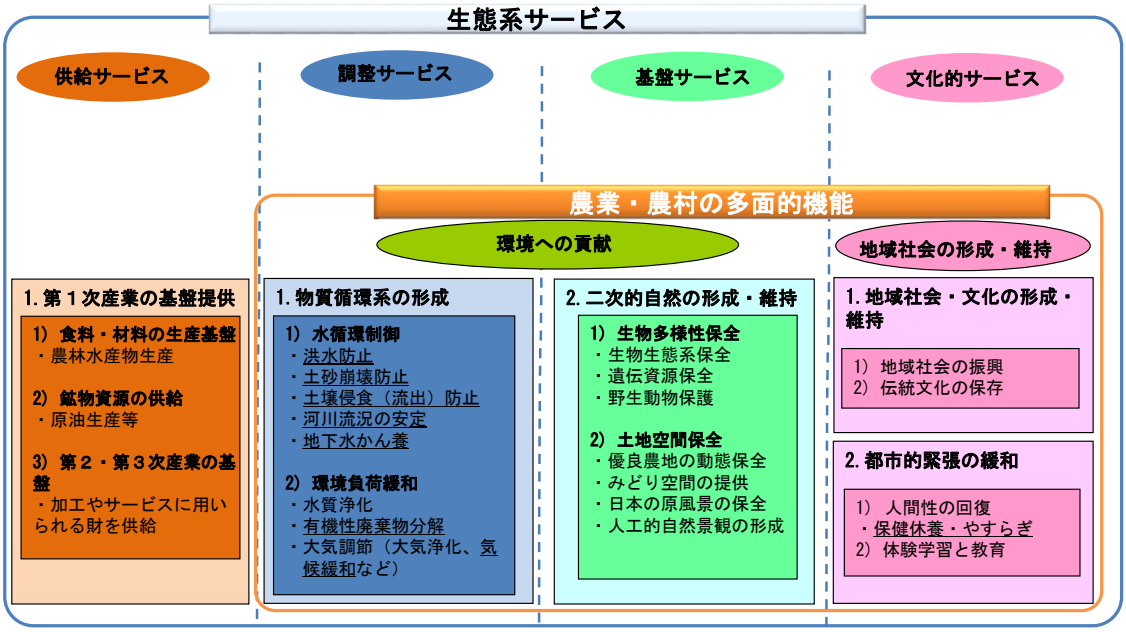
１．はじめに

わが国の農林業・農山村では，食料や木材の自給や生産・供給などの第１次産業としての活動に加え，物質循環，二次的自然の形成・維持，地域社会の形成・維持などの，農林業生産活動に付随して生じる様々な機能が発揮されており，このような機能を，農林業・農山村の多面的な機能として把握する試みが 1990 年代より行われてきた（千賀，1997;農業総合研究所，1998）。2001 年には日本学術会議より，農林業・農山村の多面的な機能の整理と機能の一部に関する経済的な評価が公表された（日本学術会議，2001）。その中では，洪水防止機能で３兆 4,998 億円，河川流況安定機能で１兆 4,633 億円などと個別の機能ごとの金銭価値を計算したうえで，貨幣評価が可能な機能のみの評価総額を８兆 2,226 億円としている。

当時のこれらの評価方法については，農林業の化学肥料利用等による環境への負の影響を考慮すべきなどの問題点も指摘されているが（林・杉山，2011），国際的な農業の多面的機能における議論では，（１）農業の各々の多面的機能が農業に付随して一体的に生産される非農産物であり，切り離すことができないのか，（２）その非農産物は，農業以外の方法で供給できるのか，（３）その非農産物を農業以外の方法で個別に供給した場合に，国内および国際的観点から，農業との一体的生産よりも安価に供給する方法があるのか，などといった論点を示し（OECD，2001），これらの点を明確にしたうえで，農業の多面的機能の価値とその機能発揮への政策的支援がどのような場合に許容されるのかという視点で議論が行われてきた（OECD，2004；荘林，2003；荘林，2004）。

また近年では，「生態系の公益的機能」とも言われており，生物や生態系に由来し，人類の利益になる機能である「生態系サービス」（第１図）を把握し，その変化が人類に及ぼす影響を評価できるようにするために，現状やその動向，将来展望などの分析を世界的に行ったミレニアム生態系評価（MA,2007）や, TEEB（The Economics of Ecosystem and Biodiversity, 生態系と生物多様性の経済学）などの研究が存在する（TEEB, 2008; TEEB, 2010）。これらの活動が終了したのちでも，生態系サービスの評価の精度や範囲を広げ，既存の知見をリバイズしていく目的で，国連環境計画（UNEP）により生物多様性及び生態系サービスに関する政府間科学政策プラットフォーム（IPBES）が 2013 年に設立され，2019 年公表を目標に，非常に厳密な科学的根拠に基づく生態系サービスの評価を行うこととなっている。また評価の際には，先住民及び地域住民の知識（Indigenous & Local Knowledge，以下 ILK）と科学を融合させることを目指し，グリーン経済といった金銭的な面の評価にのみ焦点を当てず，生態系サービスへの ILK，文化やコミュニティの寄与を積極的に評価し，生態系サー

ビスの計量などへ取り組むことが議論されている（IISD, 2013; IPBES, 2013）。

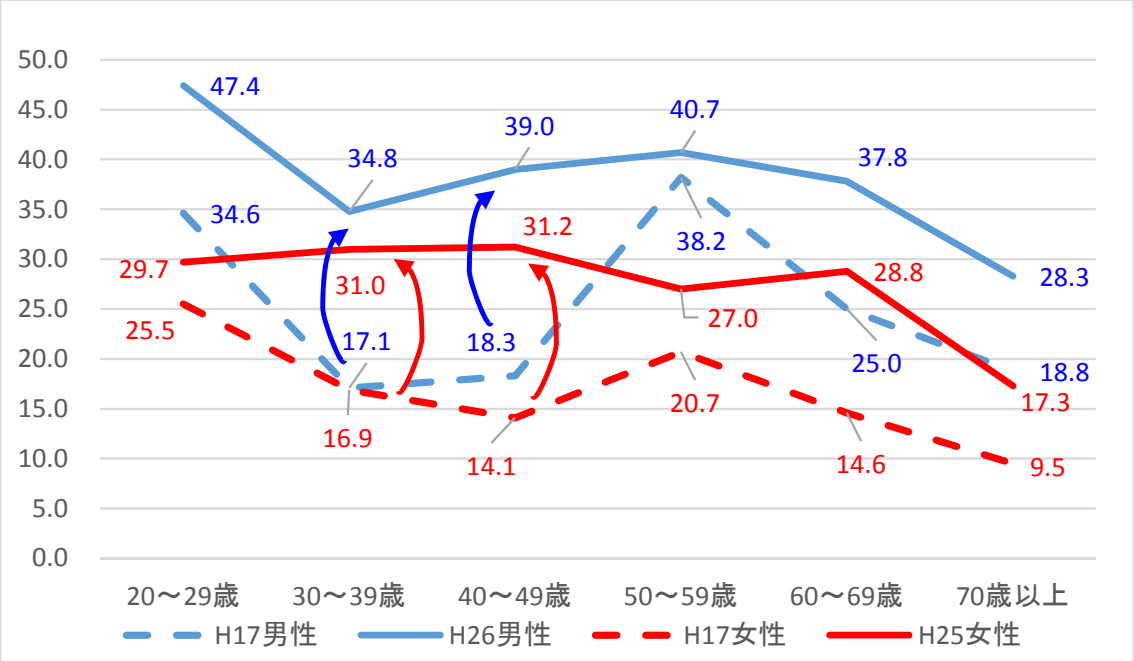


第１図　生態系サービスの分類（MA,2005 及び日本学術会議,2001 を元に筆者作成）

注．下線は，日本学術会議（2001）で経済評価がされたもの．

内閣府（2005）が国民 3000 人に対し実施した「都市と農山漁村の共生・対流に関する世論調査」では，30%の有効回答者が，都市と農山漁村の共生・対流の実践をしたいと回答しており，また，都市部に住んでいる回答者の 20%が農山漁村地域への定住の願望を持っていた。この数字を年代別に見ると（第２図），田園回帰志向の主役は，10 年前の 50 代及び 20 代中心から，近年では 20 代から 60 代まで，まんべんなく分布している。加えて，農山漁村地域に行くことによる児童の農林漁業・農山漁村体験学習については，88%の回答者が取り組むべきであると回答している。

このような結果は，農山漁村に「緑」「ゆとり」や「やすらぎ」を求める都市住民の存在や，農山漁村に存在するコミュニティ，農林漁業や自然環境等を体験することが，幼少期から青年期の人格形成に有意義な効果を持つことが，多くの国民に認識されていることを示している。



第２図　農山漁村地域への定住願望の有無（%）（内閣府 2005，2014)

※ 数字は，回答の７つの選択肢「１.ある」「２.どちらかというとある」「３.ない」「４.どちらかというとない」「５.ない」「６.どちらともいえない」「７.わからない」のうち，各年齢階層の回答者毎に，農山漁村地域への定住願望が「ある」または「どちらかというとある」と回答したもののパーセント.

農山漁村には，都市と比較して山，川，海や農地，林地，漁場などが日々の生活の中に身近にあり，子どもに対する農林漁業の理解，自然教育や環境教育の場としての価値を持つことは広く認知されている。1000 人以上を対象とした学生への調査では，小・中学生時代の農作業体験や生きもの体験が，成長とともに自然を大切にし，環境配慮行動をもたらす効果（呉・無藤，1998）や，大学生の有機農産物・地域農産物や環境に優しい商品の購入と幼少期の「キャンプ」経験に正の相関があったり，幼少期に自宅周辺に田んぼや畑があった学生と現在の市民団体での活動などの社会貢献活動に正の相関があり，そのような環境で育ってない学生との間に差が見られた（宮川他，2009)。

農山村・農林業体験による効果を年齢層別に見ると，小学生の体験による調査では，「人との接し方を学び目標に向かい協力」する，「ルールや時間を守る」などの因子が見られるようになったり（鈴村・馬場，2010)，意識していなかった食べ物に対する考え方が変わり，大変な作業を通して作られていることがわかるようになったり，農家の人の大変さもわかるようになったり（野田，2009)，学習意欲誘発効果，理科の知識として教科教育効果，情操教育効果，家族内交流促進効果が見られたり（森島，2001)，生命への関心や，仕事・規範への関心が高まったり（鈴村・中村，2010)，田んぼに素足で入る経験を，最初は「気持ち悪い」「入りたくない」などといっていた児童が，作業後には「気持ちいい」，「好き」などと発言し，触覚を通した直接体験により，ふだん捉えにくいことに気づいたり，愛情を抱いたりした（小林他，2003）などの結果が得られている。

また児童の精神面での影響では，体験の 1 週間前に比べて直後で子どもの緊張・不安が有意に緩和され，農家や地域の人とのふれあいが最も印象に残ったという子どもほど，怒り・敵意，疲労が緩和され，友達同士のふれあいが最も印象に残ったという子どもほど，緊張・不安，怒り・敵意，疲労が緩和されていた（山田，2008）。山田（2008）は，農村の自然環境に加え，滞在先の農家や友達と滞在先で多様な体験を行いながらコミュニケーションをとることで，子どもの気分が良好に変化すると考えられると考察している。

このような結果を受け，文部科学省，農林水産省，総務省の連携事業として平成 20 年度から小学生を対象に「子ども農山漁村交流プロジェクト」が始まり（農林水産省，2014a），農林漁業体験や農林漁家での長期宿泊を通じて，食の大切さを学んだり，自然や文化に親しむ取組みが行われている。このプロジェクトでは，農山漁村での宿泊が 3 泊以上と長くなるほど，環境保全意識の向上や生命への関心といった点で，児童への教育効果が飛躍的に向上することが明らかとなっている（農林水産省，2014b）。

また，中学生の農業・農村体験の効果に関する調査では，「植物を注意して見るようになった」，「植物を育てることは面白い」などの影響が見られた（會田・石田，2003）というものがり，高校生の農業・農村体験の効果に関する調査では，「汗を流して働くことの大切さを知った」，「協働・協力の気持ちを持つようになった」といった社会生活に関わる側面で意識が変化したこと（澤内他，2009）が明らかになっている。

農学部の大学生の農業体験の効果に関する調査では，専門科目の基礎となる知識や体験の習得や，「共同作業の重要性」について高い効果が得られたり（阿部・堀内，2003），有機農業などの生産システムへの関心，農業労働の大変さと食への考えの深まり，また，農村の自然が人々の労働によって管理された生態系であるという理解が得られたり（小松崎 2003），参加前後で「食料・農業・農村に関する知識を得たい」，「現場の問題解決に役立つ研究がしたい」，「現場の問題解決に役立つ活動がしたい」などの思いが増加したり（板倉他，2008）する効果があった。また参加したことで「農村環境に対する理解や発見」，「農村振興手法の学習や経験」，「モチベーションの向上や進路選択への影響」，「住民とのコミュニケーションを通した発見や自身の表現能力の向上」という 4 種類の教育効果が学生にもたらされたり（多炭他，2009）と，農業・農村を様々な視点でとらえ，自身が社会でどう行動するべきか・行動したいかという学び・活動モチベーションを得ている。

また，継続的に農業・農村体験を続けることで，個別農家と学生グループとの関係性が強まり，農家が一方的に教えるという傾向から，対話を通して学ぶ・学びあうという傾向に変化した（中塚他，2013）という結果も得られている。

農学部に所属しない大学生が農業・農村体験をしたことによる効果の調査では，大学の授業での経験を通じて，「社会的視野が広がった」，「知的関心を呼び起こされた」という結果が得られている（室田他，2005）。また効果の調査ではないが，サークル活動として自主的に農業・農村体験を行っている東京農工大学「耕地の会」は，大学生になってはじめて農業・農村と接する人達の活動の場としての役割を果たし多くの学生が参加している（阿部山，2012）。このような農業・農村体験に参加する学生に対し，下平と加藤（2009）は，

野菜の収穫や播種などの活動ニーズを調査している。

これらをまとめると以下の第３図のようになり，小学校から中学校，高等学校，大学生と進学するにつれ，対象となる農産物や受け入れる大人，農業・農村への理解が進み，徐々に社会性や専門性を獲得する。

小学生：　食や農への関心、人と接し方、ルール遵守などのマナーを学ぶ

↓

中学生：　土・植物への慣れや関心を呼び起こす

↓

高校生：　汗を流して働くこと、協力して働くことを学ぶ

↓

大学生（農学部）：　農林業に関わる専門知識と現場での実践を、自身が社会人になってからの視点で生かすことを意識する

第３図　農林業・農山村体験活動における初等・中等教育ごとの効果概要（既存の文献をもとに著筆者作成）.

また，子供から学生，成人と成長するにつれ，自然の風景の好みが少し変化するという研究もあり（Balling and Falk ,1982），小さなころや中高生における農山漁村での体験だけが，その後の食への関心や環境配慮行動の実践を高めると言い切る事も難しい。そこに，小さなころを経て成人になり就業する前に，職業訓練や専門教育を受ける青年期の農林業体験が持つ意味についても，明らかにする意味がある。

また，農作業体験や生きもの体験による影響は，都市部の学生と農村に近いところに居住する学生間で異なり，都市部に居住する学生でより高いことが示され，より強く自然的環境を求めていることが示されている（呉・無藤，1998）。このような点で，都市部に居住する学生にとっては，農林業・農山村での経験が持つ意味が大きなことが示唆される。しかし既存の農林業・農山村体験調査の事例では，参加対象者が大学教育の履修単位の一つや研究室のゼミとして出席を義務付けられていたり，関心のある農学部所属の学生が正課の専門教育に加えて自発的に参加したりというものである。

特に農学を専攻しない，都会に居住する学生が地域おこしや援農ボランティアなどという形で農山村に自主的に行くことが近年増加しており（第１表）中でも，農山村の住民と交流しながら農林業を体験するという活動するという，地域のコミュニティにどっぷりと入り込み農林業を体験する活動が増えている（第２表）。一方で，そのような学生の動機等を解明した事例が見られず，加えて，効果の測定において，参加直後のみアンケートをしたり，参加前後に計２度アンケートを実施し，その後に追跡して効果を計測したりということがなく，農林業・農山村体験による効果が，体験後に継続するのかが不明である。そ

こで本稿では，日頃から農林水産業に関わりのない青年が，農山村において，地域のコミュニティとの関わりをもちながら長期滞在し，農林業を体験することが，どのような影響を及ぼすのかを前後３度のアンケート調査を用いて調査する。

第１表．2015 年現在の大学生による自主的な農山村・農林業体験活動サークル数（筆者調べ）

設立年	1956～1990	1991～2000	2001～2010	2011～2013
団体数	6	5	29	5
(うち農学系)	(2)	(1)	(5)	(1)

注１．農学系とは，部員が農学部のみで占められている団体である．
注２．自主的に農山村に行き，農林業を体験し，農林家と交流する団体のみを抽出し，「学校の実習等，大学の単位や就職活動に結びつく活動」，「食育，環境教育等が主目的の活動」，「農山村の住民と交流しない農林業活動」をする団体は除外した。また，2015 年時点でも活動中の団体を集計し，解散や活動休止団体は除外した.

第２表．大学生による農林業体験活動サークル例（2015 年現在。筆者調べ）

	団体名	学生の出身学部	設立	活動内容
1	A大学 サークルA	農学部、法学部、経済学部、文学部等	2006	「現場」を重視し、学生と農家の距離を縮めることを目的とし、農学部生だけでなく学生全般に対して幅広く農業体験等の斡旋を行う。
2	B大学 サークルB	農学部	2009	“農”の現場、“食”の現場を知り、農産物を実際に作り、売って、皆で学んだことをシェア
3	C大学 サークルC	工学部、情報科学部、理工学部、生命科学部	2009	農業･地域･大学の連携作りを目的として活動 ･伝統農作物を援農先農家で栽培し学祭やファーマーズマーケットに出店 ･地元農作物の食堂への導入　･地域交流　･堆肥作成
4	D大学 サークルD	獣医学、食品化学、家畜生産科学、環境農学等	2010	地域の魅力を発見・発信することを目的に活動。地域の勉強をし、食と農について考え、フリーペーパー等を発信。
5	E大学 サークルE	法学部　経済学部　工学部　農学部等	2012	農作業補助や出荷、地元大学生や留学生に対する農業体験等を実施し、学生地域ベンチャーを確立
6	Fサークル	首都圏の多数の大学の学生で構成	2001	限界集落で「魅力的な農村づくり」を目標に活動
7	G大学 サークルG	農学部　理学部　経済学部	2010	疲弊や高齢化する農村を盛り上げていくため、主に集落の山の整備等を実施。
8	H大学 サークルH	文学部　教育学部　政治経済学部　法学部　理工学部等	1967	農山村で、年三回の合宿を通じて育林活動。
9	Iサークル	関西の複数大学の学生で構成	1998	間伐等の森林作業を中心とした活動
10	J大学 サークルJ	経営学部	2004	地域活性化の活動を通じて経営学を学び実践。田んぼ耕作、茅葺屋根メンテナンス、物産販売、味噌づくり、経営実践ワークショップ･勉強会を実施。
11	K大学 サークルK	経営学部　環境情報学部	2004	離島・中山間地の援農ボランティア、産直市開催等
12	L大学 サークルL	農学生命科学部	2007	農作業の体験・手伝い、郷土料理作り、食材を活かした新メニューの開発、雪かきボランティア、市民農園での野菜作り等
13	Mサークル	首都圏の多数の大学の学生で構成	2007	農業の現場で学び、地域に貢献するため以下を実施 １　農家研修（農家での農業体験） ２　生産・加工（自分たちで一から農産物生産や加工） ３　販売・イベント（都会の方々に地域や農業を発信）
.....	.....		...	.....

２．方法

農林業・農山村体験を行う都内のＡ大学２グループ及びＢ大学１グループの計３グループを対象に，体験直前・体験直後・体験 1 ヶ月後に同じ質問でアンケートを実施した。アンケート内容は，大きく分けて，学生の「参加目的」，「幸せと仕事への考え」，「仕事への取り組み方」，「農林業・農山村への考え」の４分類を設定し，回答は背景にある考えを因子分析で調べた。用いたアンケート票の設問例は第３表に，全体は文末に添付する。

また比較のため単位取得の一環として農林業・農山村体験に参加する農学系のＣ大学の１グループも同様のアンケート調査を体験直前・体験直後の計２度実施したが，１ヵ月後の３度目のアンケートは実施できなかった。

第３表　アンケート設問例

このプログラムによって、あなたはどのような成果が得られると思いますか。最も近いものに1つだけ〇を付けてください。

①自身の視野が広がると思う

全く思わない	思わない	あまり思わない	少しそう思う	そう思う	非常にそう思う
1	2	3	4	5	6

②自身の成長ができると思う

全く思わない	思わない	あまり思わない	少しそう思う	そう思う	非常にそう思う
1	2	3	4	5	6

（１）Ａ大学Ｒグループの活動

Ａ大学では，学生時代から社会経験を積むこと，助けを必要としているひとの役に立つこと，自分の世界を広げることなどのきっかけとして，様々な自主プログラムを提供している。その中に，東北地方の農山村での農業・農村体験プログラム（参加費 23,000 円）及び林業・山村体験プログラム（参加費 27,000 円）が存在し，10 学部で構成される学部の様々な学生が，自主的に費用を払い参加している。このプログラム参加学生全員に，参加直前，参加直後，参加１ヶ月後の３度のアンケート調査を行い，参加前後での意識の変化を調査した。

農業・農村体験プログラムのＲグループのスケジュールとアンケート実施日は第４表のとおりである。また，農業・農村体験内容は第５表のとおりである。Ｒグループのプログラム概要については３．６章の第 44 表に掲載した。体験の特徴としては，夏休みのプログラムに様々な学部の様々な学年から初対面の学生が参加するため，出発前にグループに分かれ顔合わせをし，グループ内外での訪問自治体と地場産業の勉強等を２度行い，学生間で友人関係も作ってから現地に入ることである。それにより，現地に入ってから学生間で「はじめまして」と挨拶をし知り合う必要がなく，現地到着後に農家と学生とのコミュニケーションにすぐに集中することが可能となっている。

このＲグループのプログラムは，毎年参加人数が 15 名ないし 18 名と決まっており，それに対し学生の応募が定員の３倍程度あるため，参加希望学生は志望動機の作文をＡ４用紙１枚程度に書いて提出し，主催者側で書類選考を行う。

第４表　Ａ大学Ｒグループ　農業農村体験活動スケジュールとアンケート実施日

2013年9月5日（木）～9月10日（火）		5泊6日	
	アンケート	事前　8月29日（木）	
		事後　9月10日（火）	
		1ヵ月後　10月11日（金）	n=15名
2014年9月8日（月）～9月13日（土）		5泊6日	
	アンケート	事前　9月1日（月）	
		事後　9月13日（土）	
		1ヵ月後　10月17日（金）	n=15名
2015年9月7日（月）～9月12日（土）		5泊6日	
	アンケート	事前　8月31日（月）	
		事後　9月12日（土）	
		1ヵ月後　10月16日（金）	n=18名

第５表　Ａ大学Ｒグループ　農業農村体験活動内容

大学概要	都内大学。農学部なし。
グループ概要	第43表参照
事前準備	事前勉強会（現地農業、住民、環境と農業等のテーマでグループミーティング。所属大学教授による農業経済講義）2回及び学生MLで準備等のやりとり
活動費	参加費数万円の自己負担
実施場所	東北地方の農山村
活動の自主性	夏休みを利用した大学提供自主参加プログラム
現地宿泊タイプ	自炊をしながらの集落施設での学生の共同生活
民泊の有無	数名のグループに分かれ民泊1泊
農業活動	毎日、午前・午後と集落内の異なる農家に数名のグループで伺い援農（ビニールハウス撤去、田畑の除草、敷き藁の収穫、枝豆もぎ、葉物野菜収穫等）、地域の方々との交流会

（２）Ａ大学Ｓグループ

林業・山村体験プログラムのＳグループのスケジュールとアンケート実施日は第６表のとおりである。また，林業・山村体験内容は第７表のとおりである。Ｓグループのプログラム概要については３．６章の第 44 表に掲載した。体験の特徴としては，Ｒグループと同様に，夏休みのプログラムに様々な学部の様々な学年から初対面の学生が参加するため，出発前にグループに分かれ顔合わせをし，訪問自治体と地場産業の勉強等を１度行い，学生間で友人関係も作ってから現地に入ることである。それにより，現地に入ってから学生間で知り合う時間が必要がなく，現地到着後に地元住民と学生とのコミュニケーションをすぐに始めることが可能となっている。

このＲグループのプログラムは，毎年参加人数が 15 名と決まっており，それに対し学生の応募がほぼ同数ある。そのため，志望動機の作文は提出するが，ほぼ全員が参加できる状況にある。

第６表．Ａ大学Ｓグループ　林業山村体験活動スケジュールとアンケート実施日

2013年8月29日（木）～9月3日（火）		５泊６日	
	アンケート	事前　8月26日（月）	
		事後　9月3日（火）	
		1ヵ月後　10月8日（火）	n=14名
2014年8月28日（木）～9月2日（火）		５泊６日	
	アンケート	事前　8月22日（金）	
		事後　9月2日（火）	
		1ヵ月後　10月14日（火）	n=14名
2015年8月27日（木）～9月1日（火）		５泊６日	
	体験活動は実施されたが，大学側の都合によりアンケート調査は未実施		

第７表．Ａ大学Ｓグループ　林業山村体験活動内容

大学概要	都内大学。農学部なし。
グループ概要	第43表参照
事前準備	事前勉強会（訪問地域と住民の勉強及び現地共同生活用品の買出し）1回、学生MLで準備等のやりとり
活動費	参加費数万円の自己負担
実施場所	東北地方の農山村
活動の自主性	夏休みを利用した大学提供自主参加プログラム
現地宿泊タイプ	自炊をしながらの集落施設での学生の共同生活
民泊の有無	数名のグループに分かれ民泊1泊
林業活動	地域の人と学生全員で共有林でのチェーンソー及び鉈を用いた枝打ち及び間伐、炭焼き、そば打ち、地域の方々との交流会

（３）Ｂ大学Ｔグループの活動

Ｂ大学Ｔグループの林業・山村体験プログラムスケジュールとアンケート実施日は第８表のとおりである。また，林業・山村体験内容は第９表のとおりである。Ｔグループはサークルであり，サークル概要については３．６章の第 44 表に掲載した。このサークルは 40 年以上，主に除伐・間伐など育林活動を続けている歴史を持つサークルである。東北地方の山村が所有する山を分収契約によって大学が借り受け，管理をしてきた。山は約 50 年前の火災により禿山であったが，植林・育林され現在は緑を回復している。サークルでは，年三回の長期合宿（1 週間～３週間）を春・夏・秋の大学の長期休暇を利用して実施し，当初の育林活動から，現在では援農（酪農，野菜収穫等），地域小学校での交流活動なども実施している。また，長期合宿のない時には，キャンパスで週一回のミーティングを実施し，合宿に当たっての役割分担や事前学習，大学祭の出店等を行い，加えて，活動費を稼ぐために各種助成団体への助成申請や学内草刈りアルバイト等を行っている。

アンケートの対象学生は，調査時に初めて合宿に来る学生に限定し，既に林業・山村体験活動を経験した学生は除外した。

第８表　Ｂ大学Ｔグループ　農林業農山村体験活動スケジュールとアンケート実施日

2013年8月下旬～9月上旬		
体験活動にアンケート調査が間に合わず，調査未実施		
2014年8月26日（火）～9月7日（日）	12泊13日	
アンケート	事前　8月26日（火）	
	事後　9月7日（日）	
	1ヵ月後　10月10日（金）	n=7名
2015年8月25日(火)～9月5日(土)	11泊12日	
アンケート	事前　8月25日（火）	
	事後　9月5日（土）	
	1ヵ月後　10月9日（金）	n=25名(有効解答7)

第９表．Ｂ大学Ｔグループ　農林業農山村体験活動内容

大学概要	都内大学。農学部なし。
グループ概要	第43表参照
事前準備	毎週ミーティングし事前に、現地農林業や住民等を学習
活動費	参加費数万円の自己負担
実施場所	東北地方の農山村
活動の自主性	夏休みを利用したサークル活動
現地宿泊タイプ	自炊をしながらの大学施設での学生の共同生活
民泊の有無	なし
農業活動	村有林の間伐・下草刈等の育林、地域での援農（酪農、野菜収穫等）、地元小学校での小学生との交流活動、地元住民・大学交換留学生との地域交流活動等。

（４）Ｃ大学Ｚグループの活動

Ｃ大学Ｚグループの農業・農村体験プログラムスケジュールとアンケート実施日は第 10 表のとおりである。また，農業・農村体験内容は第 11 表のとおりである。Ｚグループは，ゼミ活動の一環として学科に所属する主に３年生及び４年生が，北陸地方の自治体で農業・農村体験を行っている。Ｃ大学は農学系の大学であり，農業・農村体験プログラムは，座学の授業では体験できない農業の知識や経験を補う貴重な機会を提供している。移動には高速バスを使い，参加補助として大学より一人 5000 円程度の交通費が支給されている。特徴は，滞在中ほとんどの期間を農家に民泊して過ごし，農家と衣食住をともにしながら生活するということである。それにより，農家の 24 時間の生活パターンを直に目にし，また夕食の食卓を囲んで農家と密なコミュニケーションの時間がたくさん持てるということである。

第 10 表．Ｃ大学Ｚグループ　農業農村体験活動スケジュールとアンケート実施日

2013年11月８日（金）～11月11日（月）		３泊４日	
アンケート	事前	10月28日（月）	
	事後	11月12日（火）	
	1ヵ月後	未実施	n=12名
2014年11月７日（金）～11月11日（火）		４泊５日	
アンケート	事前	11月５日（水）	
	事後	11月10日（月）	
	1ヵ月後	未実施	n=19名
2015年11月６日（金）～11月10日（火）		４泊５日	
アンケート	事前	11月４日（水）	
	事後	11月10日（火）	
	1ヵ月後	未実施	n=15名

第 11 表．Ｃ大学Ｚグループ　農業農村体験活動内容

大学概要	都内大学。農学部あり。
グループ概要	大学の農学部系の2つのゼミ所属学生
事前準備	ゼミの中で現地農業等について事前勉強
活動費	旅費を負担（自費＋大学より補助）
実施場所	北陸地方の農山村
活動の自主性	ゼミの一環として参加
現地宿泊タイプ	民泊が主で、最終日のみ地域交流施設に宿泊
民泊の有無	数名のグループに分かれ民泊3泊
農業活動	いちごの収穫、柿の収穫・皮むき・吊るし等の農作業。最終日は現地農業施設等の見学

３．結果

長期滞在型の農山村・農林業体験に始めて参加する学生の，参加直前，直後，１ヵ月後の変化の一般的な傾向を知ることを目的に，平成 25 年，26 年，27 年の各Ｒ・Ｓ・Ｔグループのデータを一つのデータとして集計することを検討した。そのために，平成 25～27 年度の各年度の各設問の解答を集計表にまとめ，各年度間のデータの独立性の検定をし（３群間のχ２乗検定），これを直前・直後・１ヵ月後アンケート集計表で３度実施した（第 12 表，第 13 表，第 14 表）。結果は，直前・直後・１ヵ月後のどの検定でも，３つのグループ（平成 25 年度，26 年度，27 年度）間に有意差が見られなかった。そのためデータを１つにまとめることとした。仮にもし有意であった場合は，３群（平成 25 年度，平成 26 年度，平成 27 年度）のうち少なくともどれか１つの群が他の群と異なることがわかる。

第 12 表．平成 25～27 年度の３群間の独立性の検定（直前アンケート）

独立性の検定　　**:1%有意 *:5%有意

カイ二乗値	自由度	Ｐ 値	判 定
0.2579	52	1.0000	

第 13 表．平成 25～27 年度の３群間の独立性の検定（直後アンケート）

独立性の検定		**:1%有意 *:5%有意
カイ二乗値	自由度	Ｐ 値　　判 定
0.2697	52	1.0000

第 14 表．平成 25～27 年度の３群間の独立性の検定（１ヵ月後アンケート）

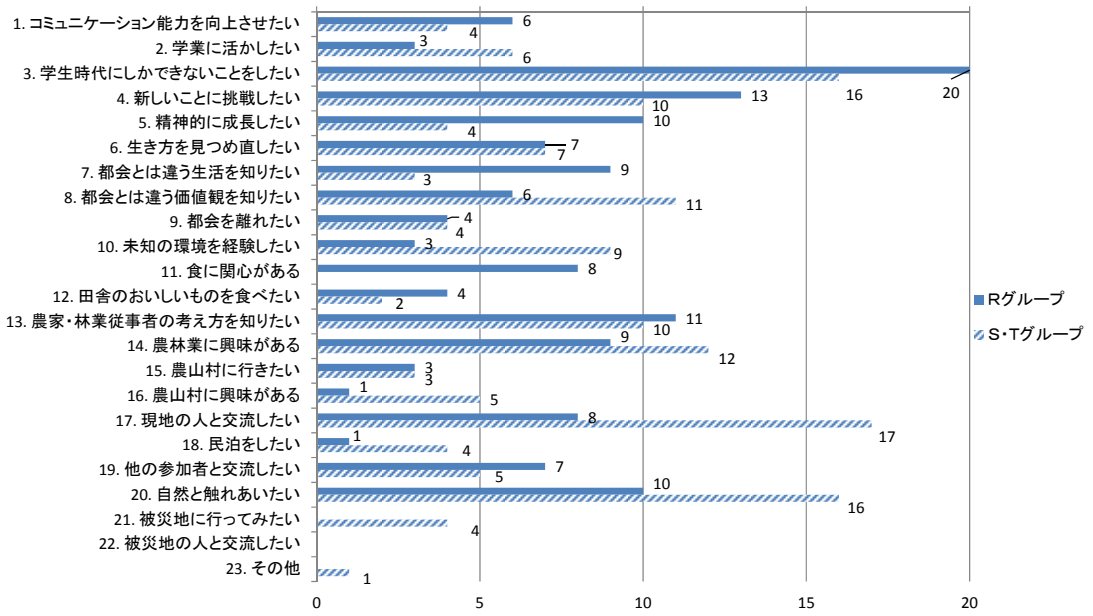
独立性の検定		**:1%有意 *:5%有意
カイ二乗値	自由度	Ｐ 値　　判 定
0.3315	52	1.0000

（１）　対象者の属性

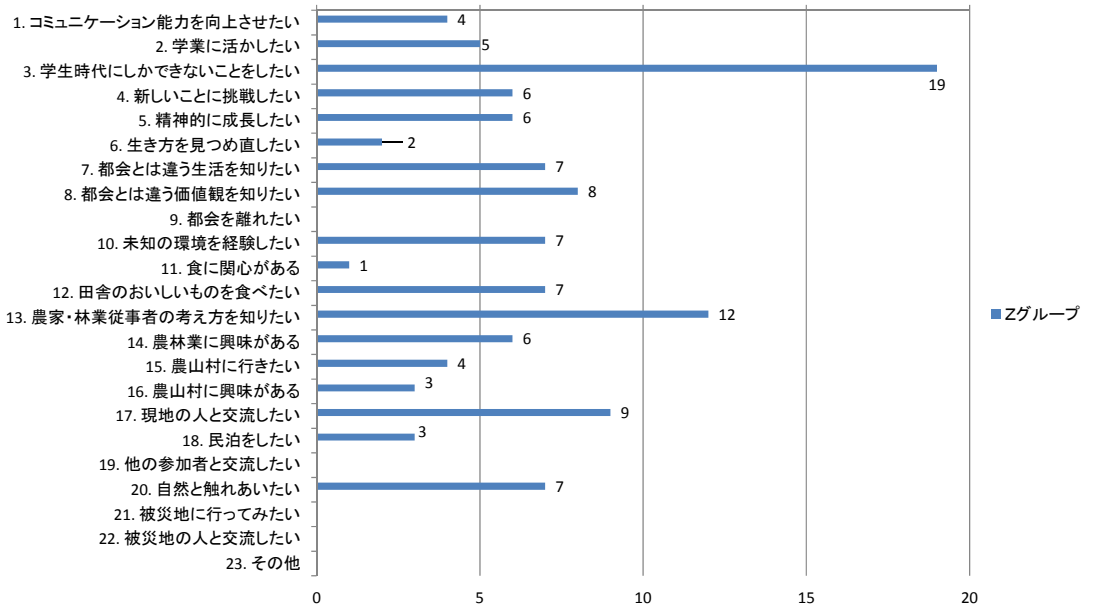
体験プログラムに期待していること（第４図，第５図）については，Ｒ・Ｓ・Ｔ・Ｚグループ全般的にまず「３．学生時代にしか出来ないこと・４．新しいことに挑戦したい・８．都会とは違う価値観を知りたい・10．未知の環境を経験したい」からなる，非日常生活への関心・経験願望の回答が多かった。次に，「13．農林業者の考え・14．農林業への興味・11．食に関心」などからなる，農林業・農山村への関心の回答が多かった。その次には，「17．現地の人と交流したい・19．他の参加者と交流したい」という交流へのの関心の回答が多かった。非農学部生のＲ・Ｓ・ＴのグループとＺグループに，特に大きな違いは見られなかった。

またＡ大学Ｓグループ及びＢ大学Ｔグループの学生では，滞在先が東日本大震災の影響を受けた市町村であるということもあり，「現地の人と交流したい」「被災地に行ってみたい」という回答があった。加えて，林業・山村を体験するＳグループやＴグループの学生は「自然と触れ合いたい」といった回答も目に付いた。

期待していることからは，日ごろ経験できない職業や社会体験の一環として，気軽に参加しているようであった。



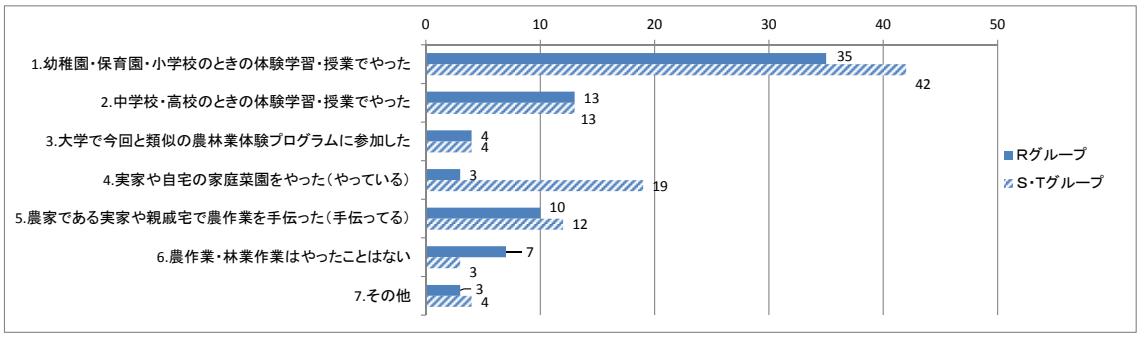
第４図　体験プログラムに期待していること（３つまで回答。Ｒ，Ｓ，Ｔグループ計．平成 25～27 年度結果）



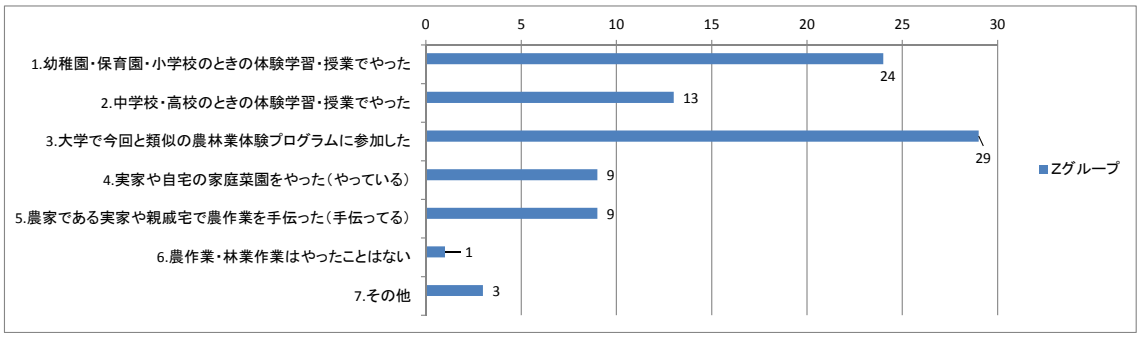
第５図　体験プログラムに期待していること（３つまで回答。Ｚグループ．平成 25～27 年度結果）

過去の農作業や林業作業体験の有無を聞いた質問では（第６図，第７図），Ｒ・Ｓ・Ｔ・Ｚグループを通じて「１．幼稚園・保育園・小学校のときの体験学習・授業でやった」割合が高く，小さいころにすでに農林業体験があるという結果が得られた一方で，少なからず，「６．農作業・林業作業はやったことはない」という回答もあった。Ｚグループでは，

「１．幼稚園・保育園・小学校のときの体験学習・授業でやった」割合も高いが，同時に「３．大学で今回と類似の農林業体験プログラムに参加した」割合も高く，Ｃ大学での授業などですでに農業実習等を経験していることを示していた。また，「２．中学校・高校のときの体験学習・授業でやった」「５．農家である実家や親戚宅で農作業を手伝った（手伝ってる）」割合は２～３割程度であった。

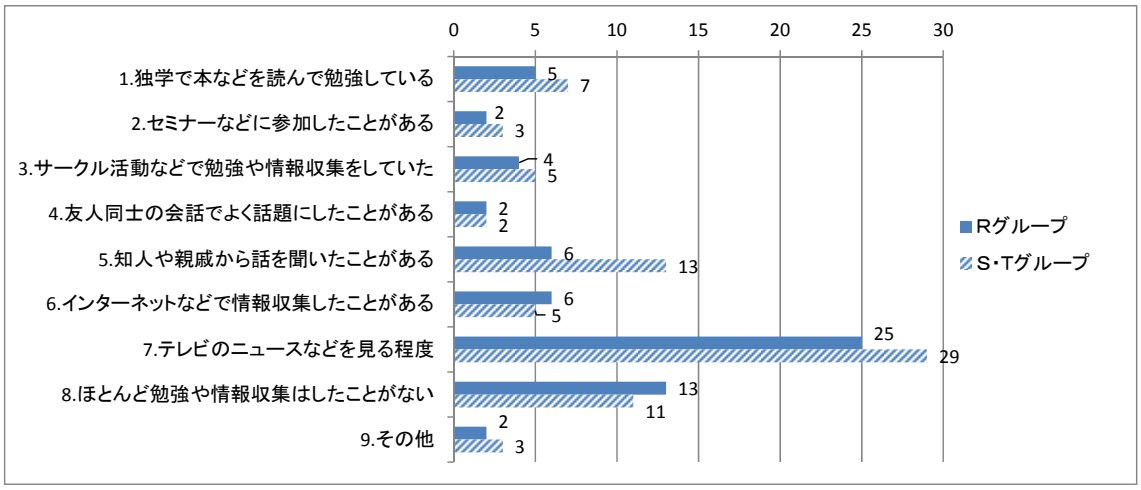


第６図　過去の農作業や林業作業体験の有無（複数回答。Ｒ・Ｓ・Ｔグループ．平成 25～27 年度結果．N=47（農業 R），52（林業 S・T））

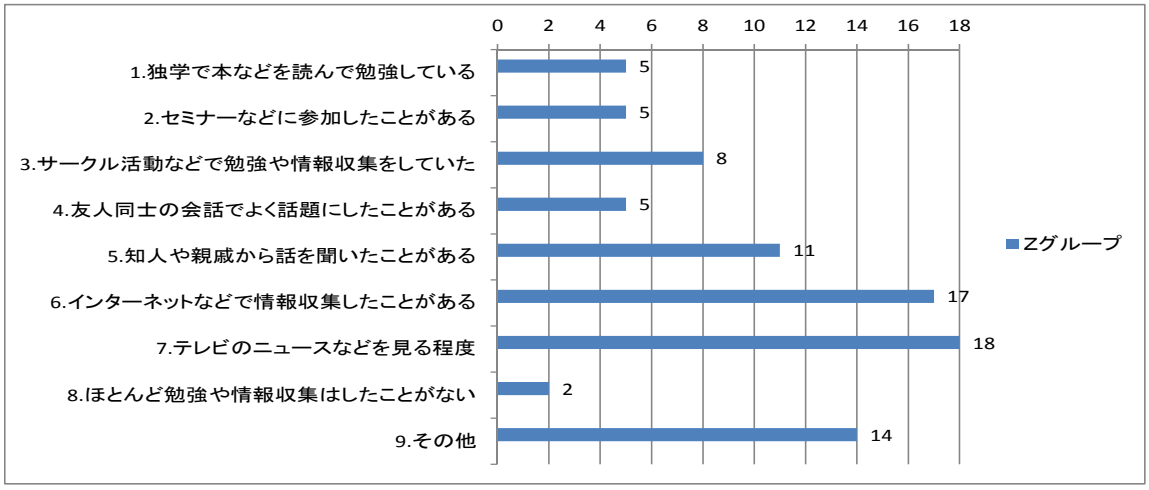


第７図　過去の農作業や林業作業体験の有無（複数回答。Ｚグループ．平成 25～27 年度結果．N=42）

過去の農業や林業に関する勉強や情報収集の有無を聞いた質問では（第８図，第９図），Ｒ・Ｓ・Ｔグループでは「７．テレビのニュースなどを見る程度」，「５．知人や親戚から話を聞いたことがある」といった，間接的で受動的な知識の習得の割合が高かった。また，農学系のＺグループでは「７．テレビのニュースなどを見る程度」の割合が高いが，「６．インターネットなどで情報収集したことがある」や「９．その他」の割合が高く，「その他」の自由記述欄では，大学の講義や実習での知識の習得があげられていた。

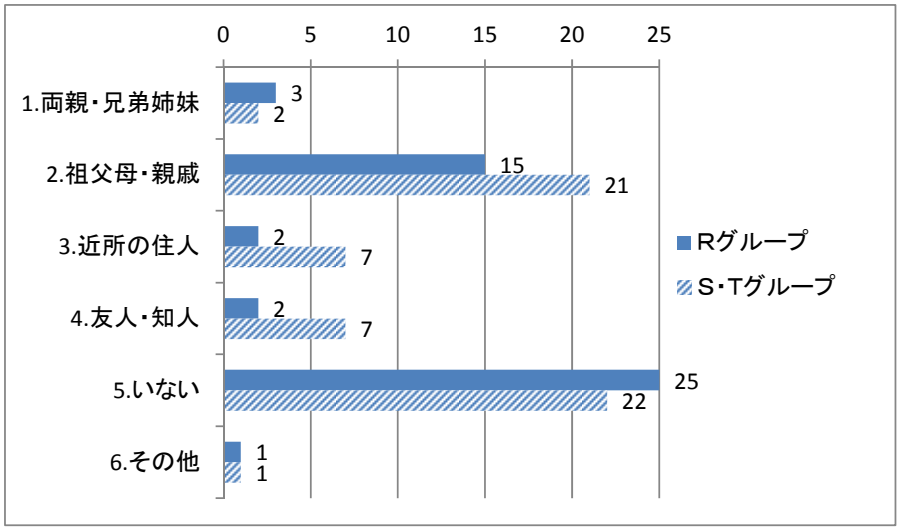


第８図　過去の農業や林業に関する勉強や情報収集の有無（複数回答．Ｒ・Ｓ・Ｔグループ．平成 25～27 年度結果。N=47（農業 R），52（林業 S・T））

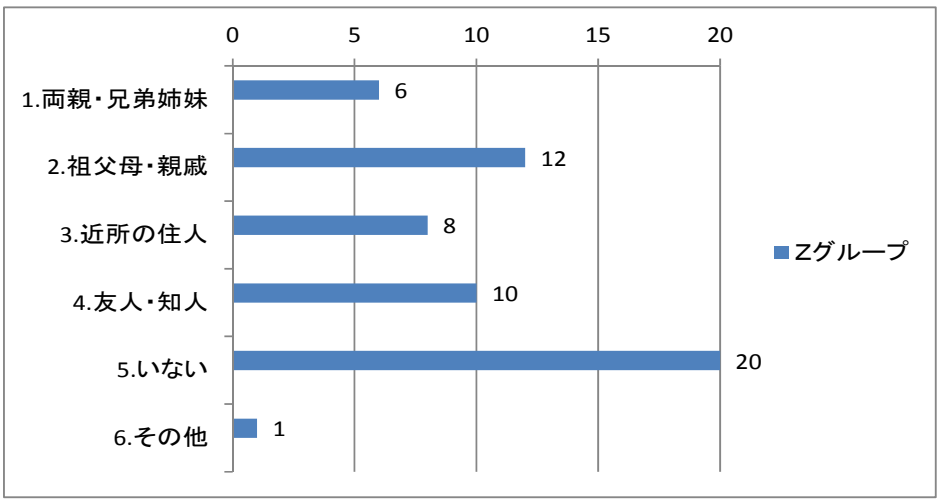


第９図　過去の農業や林業に関する勉強や情報収集の有無（複数回答．Ｚグループ。平成 25～27 年度結果．N=42

身近に農林業に関わっている人がいるかの有無を聞いた質問では（第 10 図，第 11 図），グループ全般的に「（誰も）いない」割合が高いが，Ｒ・Ｓ・Ｔグループでは，「２．祖父母・親戚」が農林業に関わっている割合が高かった。

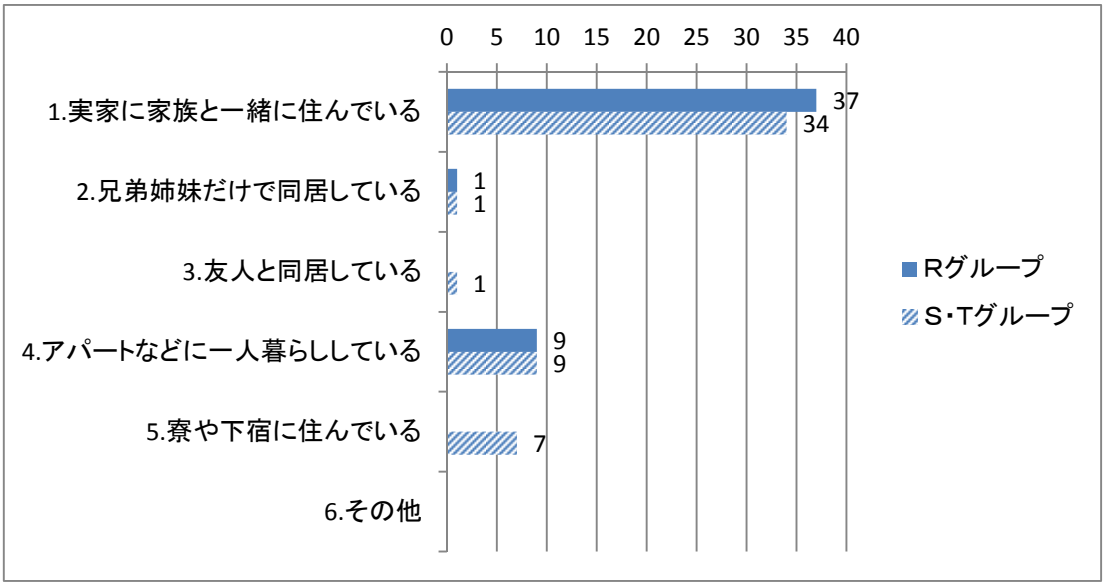


第 10 図　身近に農林業に関わっている人がいるかの有無（複数回答．Ｒ・Ｓ・Ｔグループ．平成 25～27 年度結果．N=47（農業 R），52（林業 S・T））

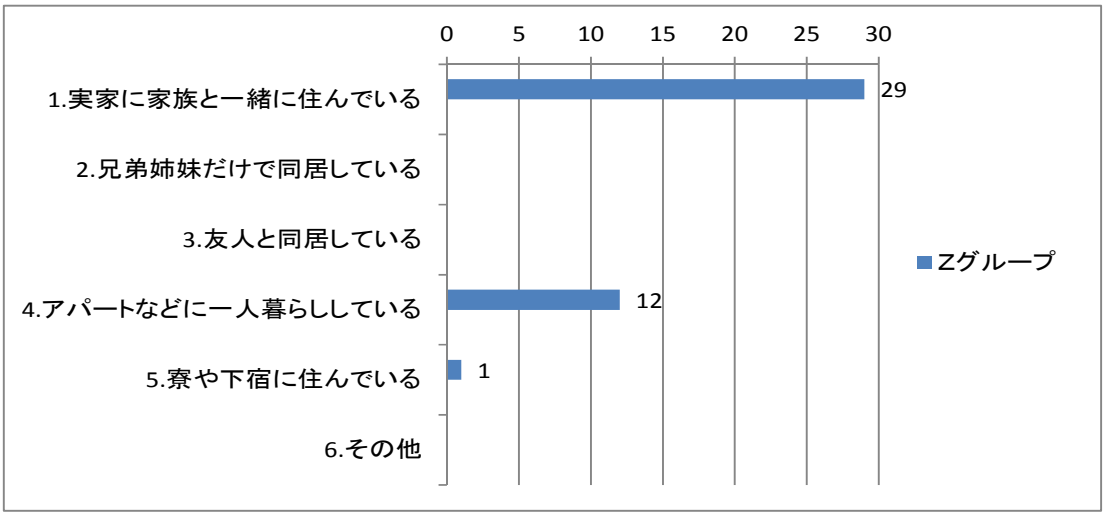


第 11 図　身近に農林業に関わっている人がいるかの有無（複数回答．Ｚグループ．平成 25～27 年度結果．N=42）

同居者の有無を聞いた質問では（第 12 図，第 13 図），農業・農村体験のＲグループで８割，林業・山村体験のＳ・Ｔグループで約７割が実家で家族と同居していた。ＴグループのＢ大学は，ＳグループのＡ大学と比較し全国から学生が集まり，一人暮らしの学生が比較的多かった。Ｚグループでは約７割の学生が実家で家族と同居し通学していた。Ｚグループのゼミ指導教官へのヒアリングでは，Ｃ大学も比較的全国から農学系を志望する学生が集まっているということであった。

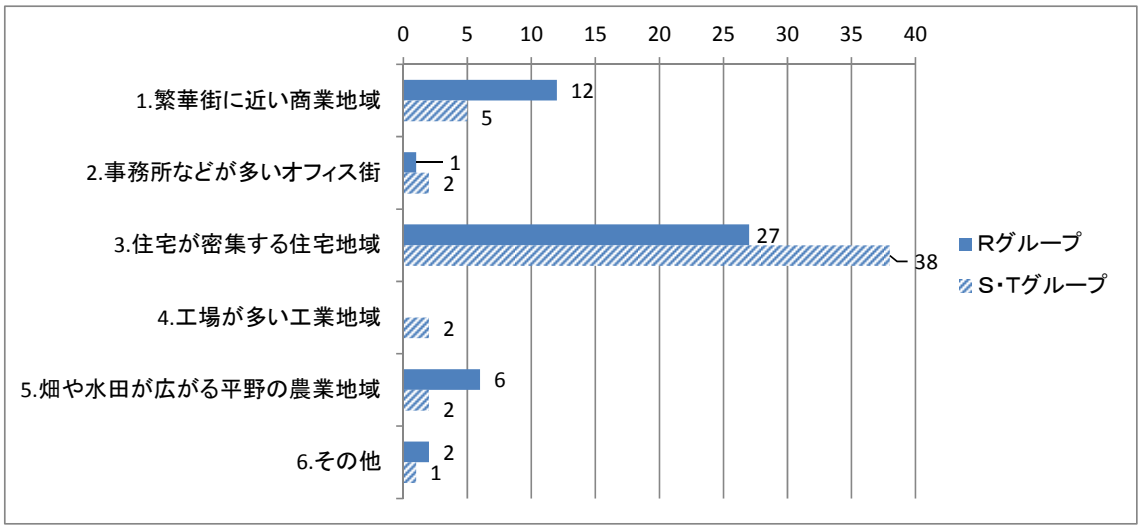


第 12 図　同居者の有無（R・S・T グループ．平成 25～27 年度結果．N=47（農業 R），52（林業 S・T））

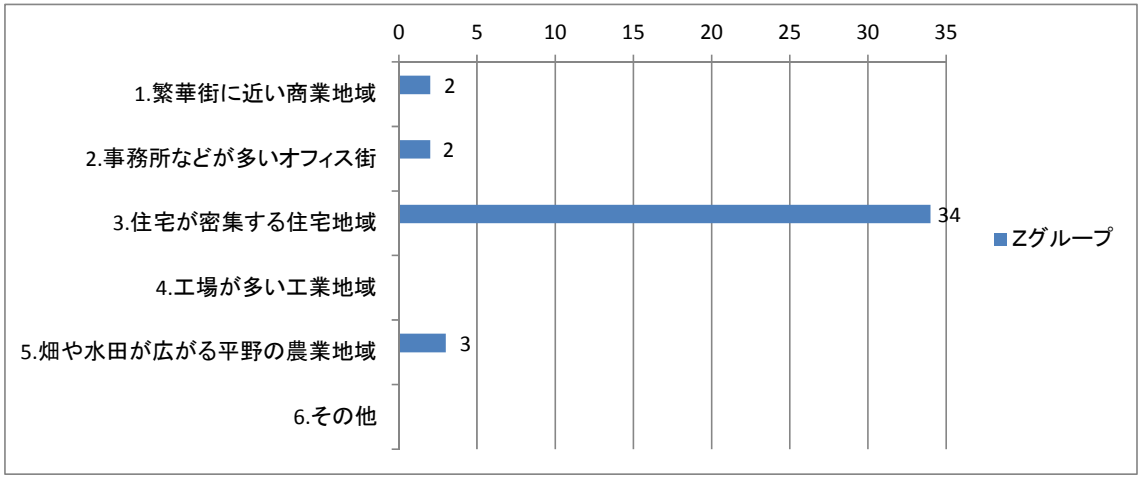


第 13 図　同居者の有無（Z グループ。平成 25～27 年度結果．N=42）

現在の居住地の属性では（第 14 図，第 15 図），ほとんどの学生が「３．住宅が密集する住宅地域」や駅近等の「１．繁華街に近い商業地域」に住み，田んぼや畑からは離れた場所で生活していると思われた。

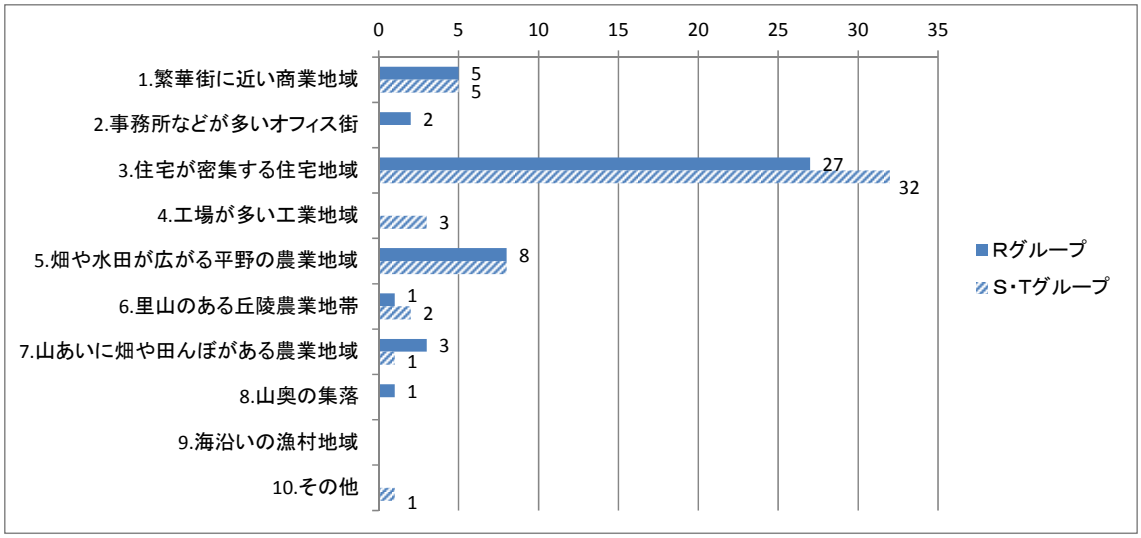


第 14 図　現在の居住地の属性（R・S・T グループ．平成 25～27 年度結果．N=47（農業 R），52（林業 S・T））

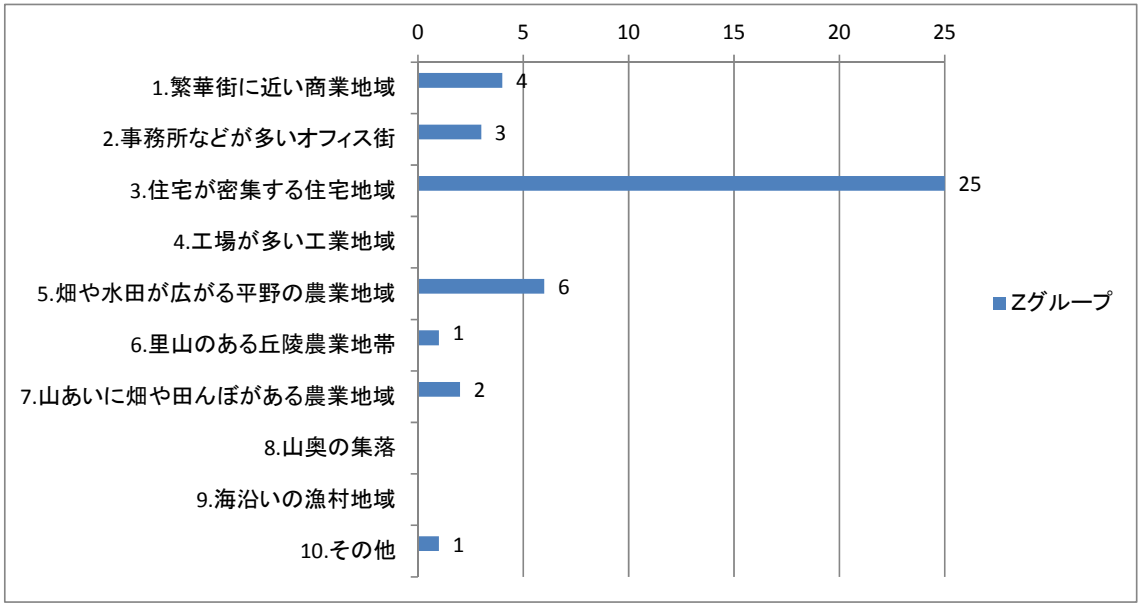


第 15 図　現在の居住地の属性（Z グループ．平成 25～27 年度結果．N=42）

出身地の属性を聞いた質問でも（第 16 図，第 17 図），全般的に「３．住宅が密集する住宅地域」や「１．繁華街に近い商業地域」の割合が高く，田んぼや畑の景色や生活が非日常である環境で育った学生が多いことが分かる。「５．畑や水田が広がる平野の農業地域」「６．里山のある丘陵農業地帯」「７．山あいに畑や田んぼがある農業地域」を合わせた農業地域出身の学生は２割程度であった。



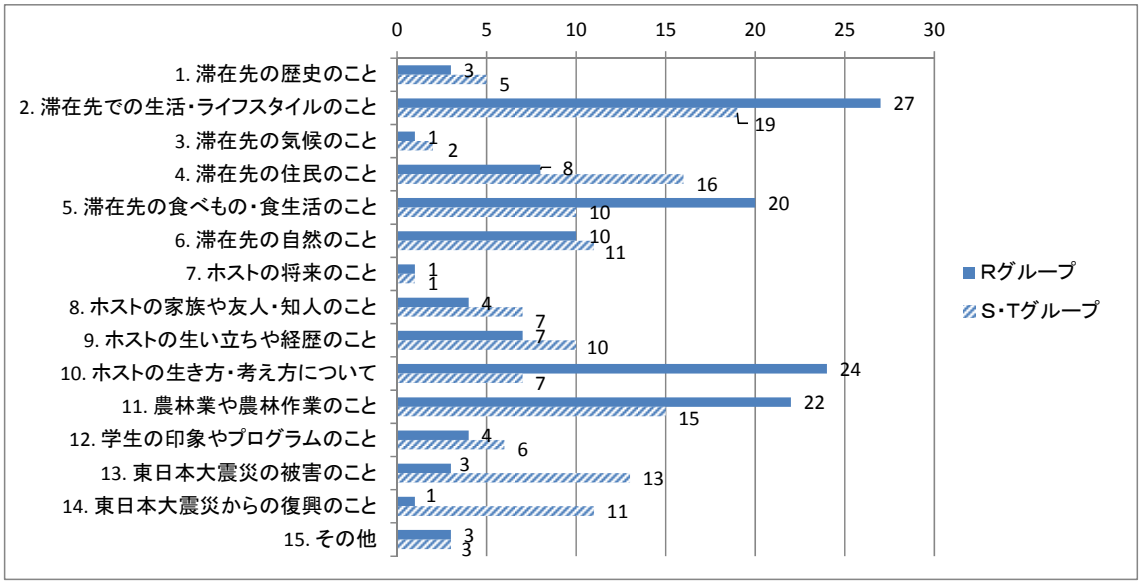
第 16 図　出身地の属性（R・S・T グループ．平成 25～27 年度結果．N=47（農業 R），52（林業 S・T））



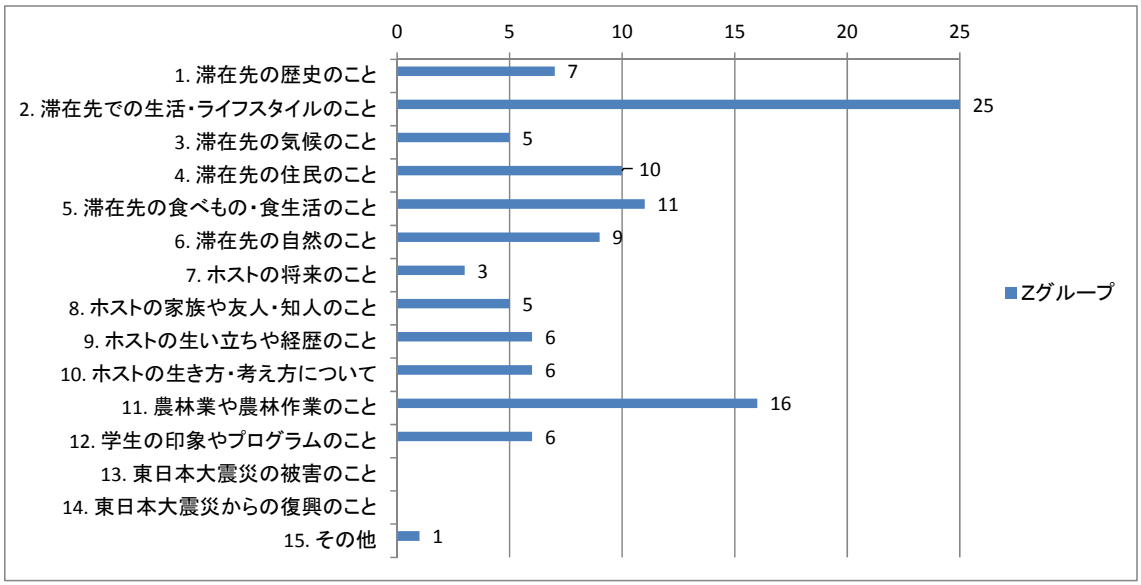
第 17 図　出身地の属性（Z グループ．平成 25～27 年度結果．N=42）

次に，農林業体験プログラム参加後に，学生が印象に残った話を調べた結果を示す（第 18 図，第 19 図）。相手からの話で印象に残ったことでは，R・S・T グループで，「2．滞在先での生活・ライフスタイルのこと」，「10．ホストの生き方・考え方について」，「11．農業や農作業のこと」，「5．滞在先の食べ物・食生活のこと」の項目が非常に多かった。また，林業・山村学生については，S グループ，T グループともに訪問先が東日本大震災の影響を受けた場所であることから，「13．東日本大震災の被害のこと」，「14．東日本大震災からの復興のこと」の項目を挙げる学生が多く，地元の住民から直に大震災の話を聞き，大

きな印象が残ったことが示されていた。Ｚグループについてもほぼ同様に（第 19 図）「２．滞在先での生活・ライフスタイルのこと」，「11．農業や農作業のこと」，「５．滞在先の食べ物・食生活のこと」，「４．滞在先の住民のこと」の項目が非常に多かった。



第 18 図　相手からの話で印象に残ったこと（３つまで回答．Ｒ・Ｓ・Ｔグループ．平成 25～27 年度結果．N=47（農業 R），52（林業 S・T））

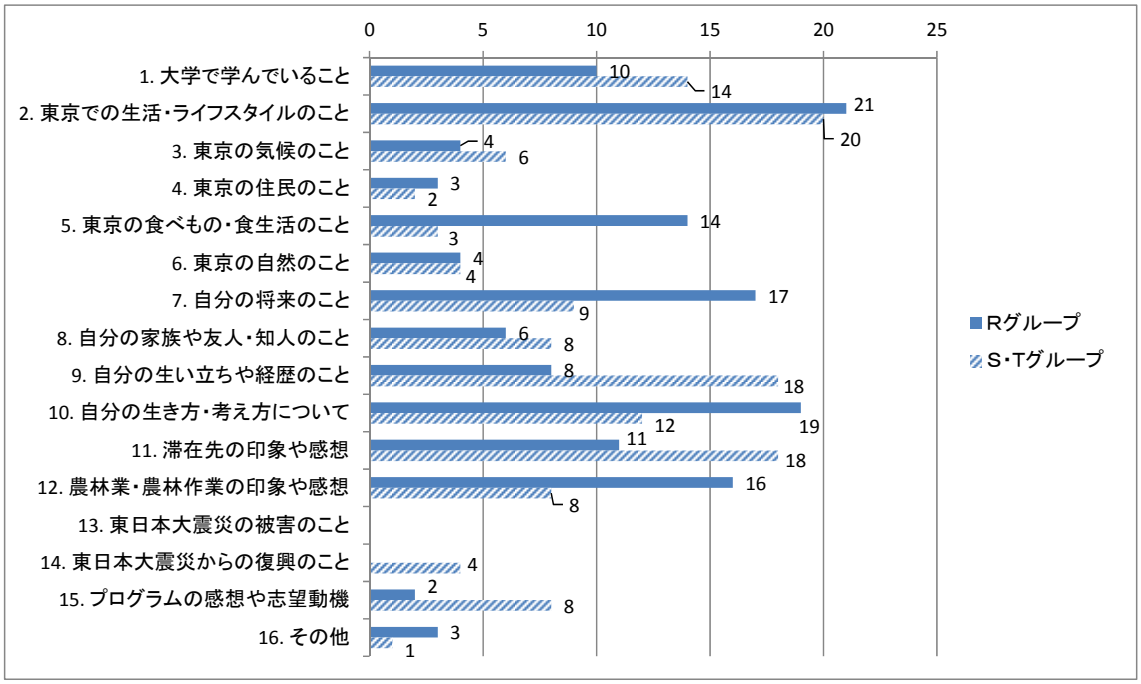


第 19 図　相手からの話で印象に残ったこと（３つまで回答．Ｚグループ．平成 25～27 年度結果．N=42）

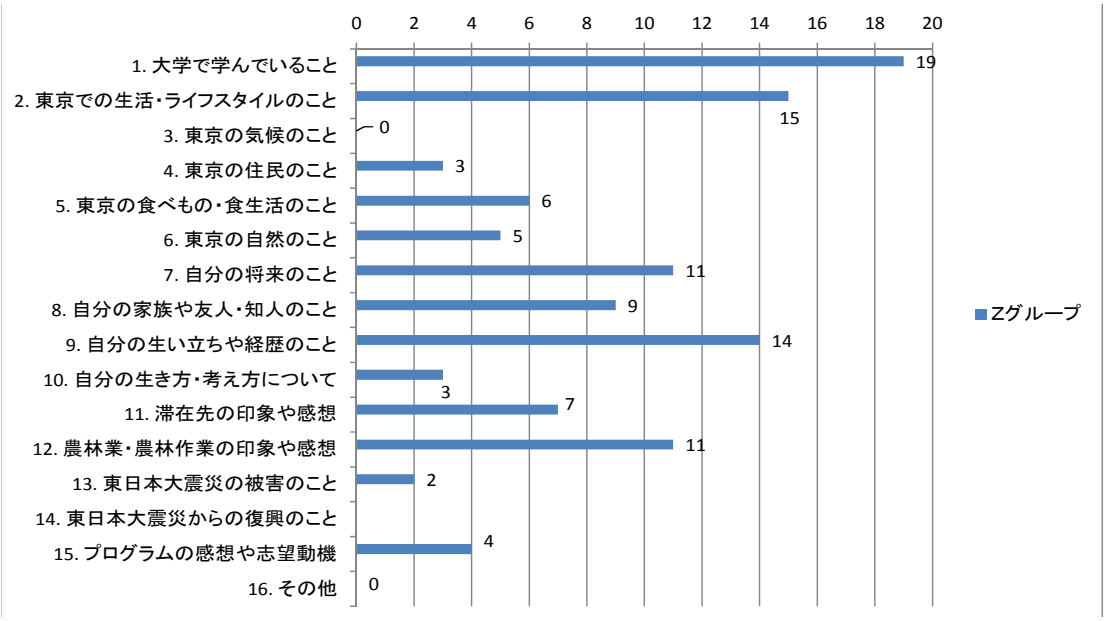
自分が滞在先でした話で印象に残ったことについては（第 20 図，第 21 図），Ｒ・Ｓ・Ｔグループで「２．東京での生活・ライフスタイルのこと」，「10．自分の生き方・考え方について」，「11．滞在先の印象や感想」，「９．自分の生い立ちや経歴のこと」，「12．農林業・

農林作業の印象や感想」などの回答が多かった。Ｓ・Ｔグループの林業・山村体験学生では「14．東日本大震災からの復興のこと」に関しても話が及び，震災を経験した滞在先を見た印象や，滞在先と大きなギャップのある東京での生活について話が及んだのではないかと思われた。

Ｚグループでは（第 21 図）「１．大学で学んでいること」，「２．東京での生活・ライフスタイルのこと」，「９．自分の生い立ちや経歴のこと」，「７．自分の将来のこと」，「12．農林業・農林作業の印象や感想」の回答が多く，滞在先の農家で自己紹介などの形で自分のことや日頃の東京での生活を話したり，農作業を終えた後に，作業の印象などについて会話があったのではないかと思われた。



第 20 図　自分のした話で印象に残ったこと（３つまで回答．Ｒ・Ｓ・Ｔグループ．平成 25～27 年度結果．N=47（農業 R），52（林業 S・T））



第 21 図　自分のした話で印象に残ったこと（３つまで回答．Ｚグループ．平成 25～27 年度結果．N=42）

（２）　学生の考え方の変化（因子分析・共分散構造分析）

次に，事前，事後，１か月後の３度の意識変化を追った因子分析等の結果を示す。Ｒ・Ｓ・Ｔ・Ｚ各グループの各年度の参加学生は 15 名程度以下であり，因子分析をする際のサンプル数としては少なすぎて解が収束しないため，個別のグループ毎の因子分析は実施しなかった。

１）　学生の参加目的の変化に関わる分析

アンケート質問項目１～８で，農林業･農山村体験に参加することで自身がどのように変化すると思うかを質問した。直前アンケート結果の因子分析では，「因子１　農林業･農山村経験欲求」，「因子２　キャリア活用」という２つの因子が抽出された（第 15 表，第 16 表）。

第 15 表．参加目的の変化を追うための因子分析結果（直前アンケート）

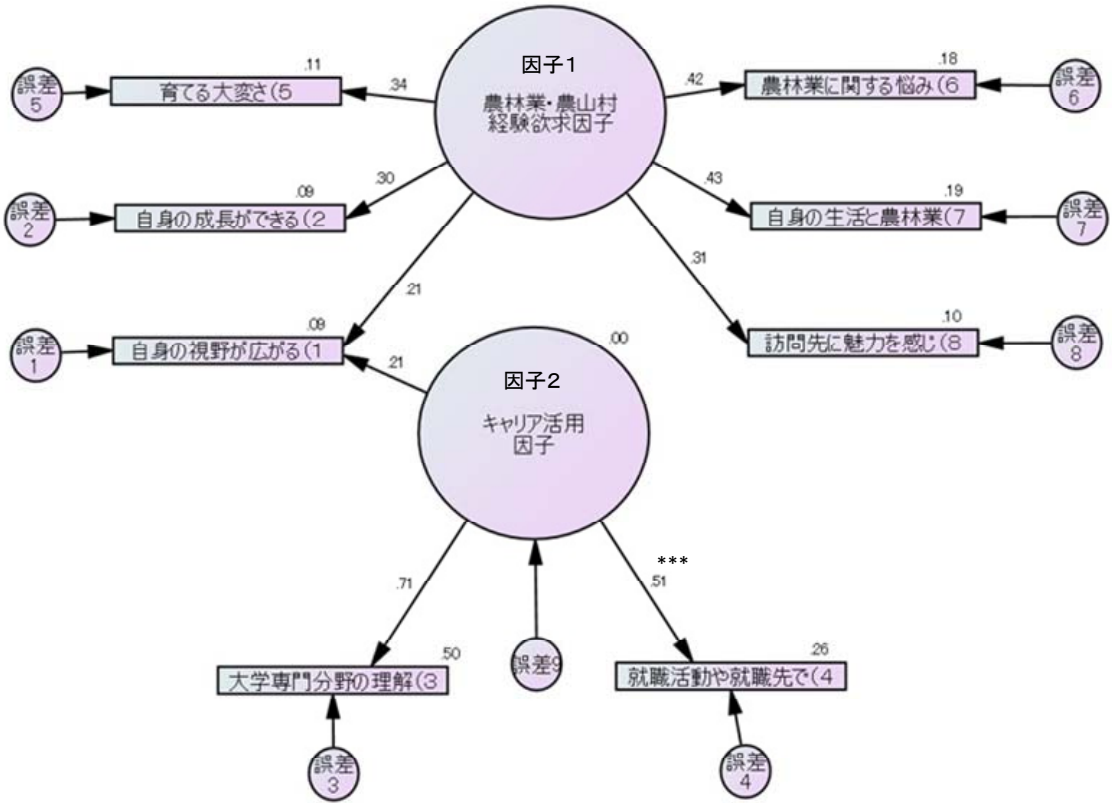
変　数	因子1	因子2
1自身の視野が広がると思う	0.3159	0.4990
2自身の成長ができると思う	0.5123	0.1859
3大学で学んでいる専門分野の理解につながると思う	−0.0940	0.6934
4将来の就職活動や就職先で役立つと思う	0.0820	0.5593
5農産物を作ったり木を育てる大変さがわかると思う	0.5023	0.0907
6農家や林業従事者が抱える農林業に関する悩みが理解できると思う	0.6569	0.0086
7自身の生活と農林業・自然との結びつきが理解できると思う	0.7853	−0.1238
8訪問先に魅力を感じると思う	0.4399	0.1029

N=108 主因子法，プロマックス回転．固有値１まで．(H25～H27 アンケート．Ｒ・Ｓ・Ｔグループ)．

第 16 表．質問１～８抽出因子（直前アンケート）

	因子名	寄与率
因子1	農林業･農山村経験欲求	41.21%
因子2	キャリア活用	13.69%

この２因子の関係を明らかにするため，第 22 図のような共分散構造モデルなど，数タイプのパス図を作成したが，いずれも各パスが殆ど有意とならず，２つの因子間に因果関係も見られなかった。これは，農林業･農山村経験欲求因子とキャリア活用因子は互いに影響を与えておらず，農林業･農山村経験が，学生のキャリア選択と別のものとして考えられており，農林業･農山村体験を通じて職業選択をするという関係も見られないことを意味した。



第 22 図　参加目的の変化を追うための共分散構造分析（H25～H27 直前アンケート。Ｒ・Ｓ・Ｔグループ．N=108）

注　数字は標準化係数（矢印部）と切片（独立変数の肩）．＊：10%有意，＊＊：５%有意，＊＊＊：１%有意

次に，同じ質問を体験直後に実施すると，上記因子が「因子１　農林業を理解しキャリア活用する」「因子２　自己の成長」の２つの因子となった（第 17 表，第 18 表）。

第 17 表　参加目的の変化を追うための因子分析（直後アンケート）

変　数	因子1	因子2
1自身の視野が広がると思う	−0.0030	0.8785
2自身の成長ができると思う	0.0065	0.9064
3大学で学んでいる専門分野の理解につながると思う	0.2858	0.2803
4将来の就職活動や就職先で役立つと思う	0.5795	0.0409
5農産物を作ったり木を育てる大変さがわかると思う	0.6423	−0.0292
6農家や林業従事者が抱える農林業に関する悩みが理解できると思う	0.6784	−0.0476
7自身の生活と農林業・自然との結びつきが理解できると思う	0.5269	0.1293
8訪問先に魅力を感じると思う	0.6113	0.1437

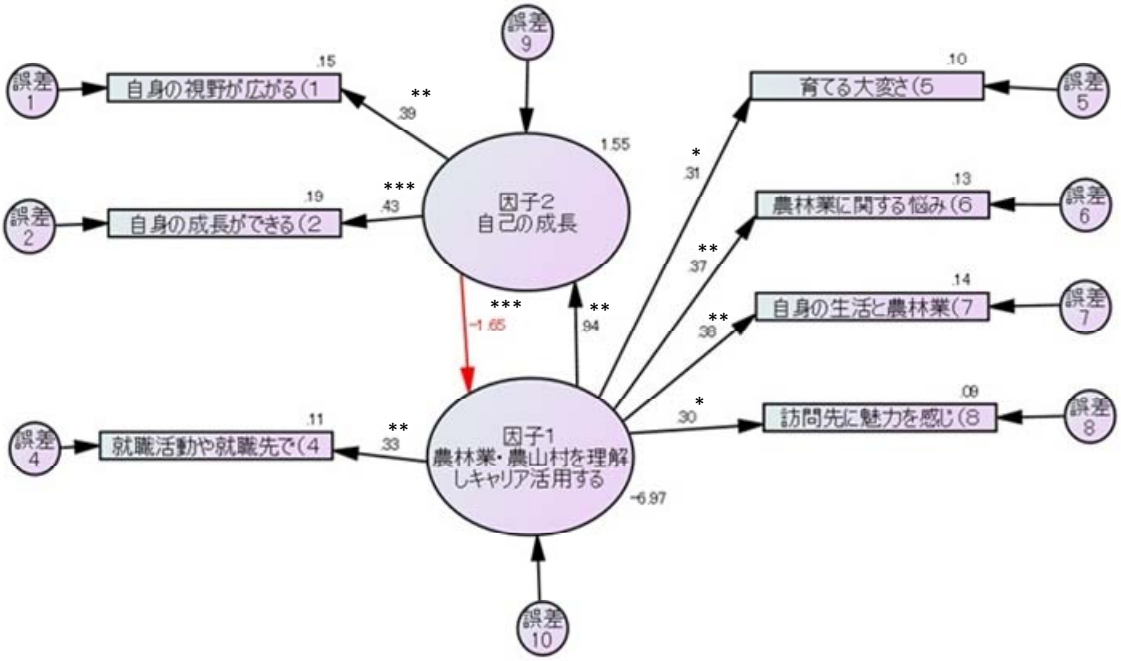
注　N=96 主因子法，プロマックス回転．固有値１まで（H25～H27 アンケート．Ｒ・Ｓ・Ｔグループ）．

第 18 表　質問１～８抽出因子（直後アンケート）

	因子名	寄与率
因子1	農林業・農山村を理解しキャリア活用する	43.74%
因子2	自己の成長	15.06%

この２因子の関係を示すと（第 23 図）「農林業・農山村を理解しキャリア活用する」因子は，「自己の成長」因子へ強い影響を与え(0.94)，その因子を通じて質問１～３へも正の効果を及ぼしていた。一方で「自己の成長」因子は，「農林業を理解しキャリア活用する」因子に負の影響を与え（-1.65)，「農林業・農山村を理解しキャリア活用する」因子を通じたその先の変数にも負の効果を及ぼした。例えば，「自己の成長」因子から「農林業・農山村を理解しキャリア活用する」因子を経由して，「将来の就職活動や就職先で役立つと思う」項目へは，－1.65x0.33=－0.545 という負の効果を及ぼしていた。「農林業・農山村を理解しキャリア活用する」意識が高い学生は，「自己の成長」にも正に影響する一方，「自己の成長」意識が高くても，「農林業・農山村を理解しキャリア活用する」意識に正の影響はないと言える。

参加前は，学生にとってキャリアプランと，農林業・農山村体験に因果関係が見られず，独立していたのが，参加後は，「農林業・農山村を理解しキャリア活用する」という因子１が出現したことは，学生が農林業・農山村体験を消化し生かそうという傾向が見られたことを示していた。



第 23 図　参加目的の変化を追うための共分散構造分析（H25～H27 直後アンケート．Ｒ・Ｓ・Ｔグループ．N=108）

注　数字は標準化係数（矢印部）と切片（独立変数の肩）．＊：10%有意，＊＊：５%有意，＊＊＊：１%有意

最後に，同じ質問を農林業・農山村体験１ヵ月後に実施すると，全ての変数を要素に含む「農林業･農山村経験が自己の成長やキャリアと結びつく」因子が現れた（第 19 表，第 20 表）。これは農林業・農山村体験活動から時間が経ち，農林業･農山村での経験と，大学での勉強及び将来の就職との結びつきを見つけ，役立てようとする考えを持つようになった結果だと思われた。

第 19 表　参加目的の変化を追うための因子分析（１ヵ月後アンケート）

変　数	因子1
1自身の視野が広がると思う	0.8257
2自身の成長ができると思う	0.7633
3大学で学んでいる専門分野の理解につながると思う	0.6132
4将来の就職活動や就職先で役立つと思う	0.5502
5農産物を作ったり木を育てる大変さがわかると思う	0.4972
6農家や林業従事者が抱える農林業に関する悩みが理解できると思う	0.3905
7自身の生活と農林業･自然との結びつきが理解できると思う	0.6523
8訪問先に魅力を感じると思う	0.7530

注　N=82 主因子法，プロマックス回転，固有値１まで（H25～H27 アンケート．Ｒ・Ｓ・Ｔグループ）．

第 20 表　質問１～８抽出因子（１ヵ月後アンケート）

	因子名	寄与率
因子1	農林業･農山村経験が自己の成長やキャリアと結びつく	48.55%

３度のアンケートを経て，農林業･農林家･農山村での経験を消化し，自分と農林業・農山村の接点が何かを考え，大学での勉強及び将来の就職との関係で一体化した考えを持ったと考えられた。

２）　学生の社会性・職業倫理に関わる分析（１）

アンケート質問項目９～２１で，仕事･生活についての自身の考え方を質問し，質問の前半部分９～１６については，幸せと仕事に関するものを質問した。

直前アンケートからは「因子１　他者に価値ある仕事をし，人とつながる欲求」,「因子２　物質所有欲」,「因子３　非交流主義」の３つの因子が出現した（第 21 表，第 22 表)。特に因子３は，農山村より都会での生活を好み，地域コミュニティに関心がなく，仕事などの物事への取り組みが中途半端というような，学生として精神的に未熟ではないかという因子が表れた。

第 21 表　幸せと仕事に関する考え方の変化を追うための因子分析（直前アンケート）

変　数	因子1	因子2	因子3
9物事に無心になって取り組むことは大切だと思う	0.1899	0.2137	−0.3465
10様々な世代の人との交流を通じ、地域コミュニティを支えることは重要だと思う	0.1997	0.0645	−0.5148
11スマホやインターネットがなければ生活できない	0.0546	0.2988	0.4092
12幸せは農山村よりも都市にいることで実感できると思う	0.1778	0.0939	0.5627
13幸せは物を持つことで実感できると思う	−0.0997	0.8890	0.0043
14幸せは人とのつながりで実感できると思う	0.5001	−0.0942	0.0743
15誇りを持てる仕事に就きたいと思う	0.7660	0.0430	0.0256
16仕事を通じて、他人の生活を豊かにしたいと思う	0.6457	−0.0746	−0.0693

N=96 最尤法，プロマックス回転（H25-H27 アンケート．Ｒ・Ｓ・Ｔグループ)．

第 22 表　質問９～16 抽出因子（直前アンケート）

	因子名	寄与率
因子1	他者に価値ある仕事をし、人とつながる欲求	25.81%
因子2	物質欲	19.73%
因子3	非交流主義	15.02%

質問９～16 の直後アンケートからは「因子１　他者に価値ある仕事をし，人とつながる欲求」,「因子２　非交流・物質主義」の２つを抽出した（第 23 表，第 24 表)。因子１では，直前アンケートと比べて質問項目９，10 の２つが新たに加わり，農林業・農山村体験を通じて，地域の農家と交流し農山村のコミュニティのつながりに触れたり，農林作業での地道さを経験したことが反映されたと思われる。

第 23 表　幸せと仕事に関する考え方の変化を追うための因子分析（直後アンケート）

変　数	因子1	因子2
9物事に無心になって取り組むことは大切だと思う	0.5961	0.2241
10様々な世代の人との交流を通じ、地域コミュニティを支えることは重要だと思う	0.5887	0.0287
11スマホやインターネットがなければ生活できない	−0.0039	0.6360
12幸せは農山村よりも都市にいることで実感できると思う	0.0146	0.3319
13幸せは物を持つことで実感できると思う	0.1385	0.5668
14幸せは人とのつながりで実感できると思う	0.5715	0.0324
15誇りを持てる仕事に就きたいと思う	0.5672	−0.2850
16仕事を通じて、他人の生活を豊かにしたいと思う	0.3512	−0.3263

N=94 最尤法，プロマックス回転（H25-H27 アンケート．Ｒ・Ｓ・Ｔグループ）．

第 24 表　質問９～16 抽出因子（直後アンケート）

	因子名	寄与率
因子1	他者に価値ある仕事をし、人とつながる欲求	29.77%
因子2	非交流・物質主義	19.03%

質問９～16 の１ヵ月後のアンケートでは，「９物事に無心になって取り組むことは大切だと思う」，「10 様々な世代の人との交流を通じ，地域コミュニティを支えることは重要だと思う」，「12 幸せは都市より農山村にいることで実感できる（値が－0.3146 とマイナスなので解釈を逆にしている）」という項目を含む「農村での損得のない交流欲求」因子３が最終的に出現した（第 25 表，第 26 表）。地域コミュニティの結びつきがあり，コミュニティの活動がある農林家を間近で観察することで，そのようなコミュニティが地域の人たちの生活や福祉など何からの形で重要であることを見出したものと思われる。

第 25 表　幸せと仕事に関する考え方の変化を追うための因子分析（一ヵ月後アンケート）

変　数	因子1	因子2	因子3
9物事に無心になって取り組むことは大切だと思う	0.1363	0.0249	0.4057
10様々な世代の人との交流を通じ、地域コミュニティを支えることは重要だと思う	0.1085	−0.1321	0.9404
11スマホやインターネットがなければ生活できない	0.1902	0.5373	−0.1671
12幸せは農山村よりも都市にいることで実感できると思う	0.0508	0.4903	−0.3146
13幸せは物を持つことで実感できると思う	−0.1445	0.9226	0.2076
14幸せは人とのつながりで実感できると思う	0.5201	0.0597	0.0933
15誇りを持てる仕事に就きたいと思う	0.9096	0.0795	0.0762
16仕事を通じて、他人の生活を豊かにしたいと思う	0.4440	−0.0518	0.0823

N=82 最尤法，プロマックス回転（H25-H27 アンケート．Ｒ・Ｓ・Ｔグループ）．

第 26 表　質問９～16 抽出因子（１ヶ月後アンケート）

	因子名	寄与率
因子1	他者に価値ある仕事をし、人とつながる欲求	31.64%
因子2	非交流・物質主義	21.15%
因子3	農村での損得のない交流欲求	12.94%

学生の社会性・職業倫理に関わる質問９～16 の分析についてまとめると，一ヵ月後のアンケートに現れた因子３に代表されるように，目の前の仕事が他人と比較してしんどいとか，損だとかいう打算をすることなく，他者と関わりあいながら，他者に役立つ仕事を損得抜きに無心で取り組みたいという思いを持つようになり，また，地域のコミュニティのもっている魅力を発見したものと思われる。

３）　学生の社会性・職業倫理に関わる分析（２）

アンケート質問項目 15～21 については，仕事への取り組み方に関するものを尋ねた。

直前アンケートでは，因子分析の解が収束せず，因子が抽出されなかった。サンプル数が 71 であり，サンプル数が少ないことも問題と思われたが，学生にこの質問に関する問題意識や考えがなかった可能性も否定できない。

直後アンケートからは，「因子１　他者のため価値ある仕事を手を抜かず取り組む」，「因子２　誇りを持てる仕事に就かなくて構わない」の二つの因子が抽出された（第 27 表，第 28 表）。

因子１からは，農林業・農山村体験を通じて，農産物を収穫したり販売したりといった成果を刈り取る仕事だけではなく，資材の撤去や草刈といった地道な作業の重要性や，それによる仕事の楽しさを認識したことがわかる。因子２から学生の考えを読み取ることは難しいが，農林業体験と農林家での収入などの知識を得て，農林業が誇りを持てる仕事である一方で，生活をしていく上での厳しさについて認識した可能性がある。

第 27 表．仕事への取り組み方に関する考え方の変化を追うための因子分析（直後アンケート）

変　数	因子1	因子2
15誇りを持てる仕事に就きたいと思う	0.7277	−0.5725
16仕事を通じて、他人の生活を豊かにしたいと思う	0.4024	−0.2227
17工夫して仕事をすると、つまらないと思ったことも楽しくなると思う	0.6770	0.1023
18地道な仕事の積み重ねが、大きな成果に結びつくと思う	0.7611	0.1369
19自分と異なる価値観を認められれば、自分の考え方が広がると思う	0.8687	0.2078
20仕事はその過程（プロセス）にも楽しさがあると思う	0.9273	0.1695
21自分のやりたい仕事ができなければ意欲がわかない	−0.1195	−0.2733

N=67 最尤法，プロマックス回転（H26-H27 アンケート．Ｒ・Ｓ・Ｔグループ）．

第 28 表　質問 15～21 抽出因子（直後アンケート）

	因子名	寄与率
因子1	他者のため価値ある仕事を手を抜かず取り組む	52.47%
因子2	誇りを持てる仕事に就かなくて構わない	15.55%

質問 15～21 の１ヶ月アンケートからは，「因子１　他者のため価値ある仕事を手を抜か

ず取り組む」,「因子２　他者を豊かにする仕事に取り組む」の二つの因子が抽出された（第29 表，第 30 表）。

因子２を構成する「16 仕事を通じ他者の生活を豊かにしたい」,「18 地道な仕事の積み重ねが大きな成果に結びつく」,「21 自分のやりたい仕事ができなければ意欲がわかない」の３項目からは，自分のやりたい仕事ではなくても，他者を幸せにすることができれば，地道に仕事に取り組むことができる，という解釈が可能である。農林業・農山村体験後１ヶ月が経過してこのような因子が出てきたことは，学生が他者との関わりを強く意識するようになり，仕事の価値基準に関して，農林業・農山村体験前にはなかったものを獲得した可能性を示唆している。

第 29 表　仕事への取り組み方に関する考え方の変化を追うための因子分析（一ヵ月後アンケート）

変　数	因子1	因子2
15誇りを持てる仕事に就きたいと思う	0.5522	0.2547
16仕事を通じて、他人の生活を豊かにしたいと思う	0.3145	0.5260
17工夫して仕事をすると、つまらないと思ったことも楽しくなると思う	0.6886	0.0469
18地道な仕事の積み重ねが、大きな成果に結びつくと思う	0.3880	0.3805
19自分と異なる価値観を認められれば、自分の考え方が広がると思う	0.7123	0.2650
20仕事はその過程（プロセス）にも楽しさがあると思う	1.0650	−0.2562
21自分のやりたい仕事ができなければ意欲がわかない	0.0937	−0.4808

N=53 最尤法，プロマックス回転（H26-H27 アンケート．Ｒ・Ｓ・Ｔグループ）.

第 30 表　質問 15～21 抽出因子（１ヵ月後アンケート）

	因子名	寄与率
因子１	他者のため価値ある仕事を手を抜かず取り組む	53.38%
因子２	他者を豊かにする仕事に取り組む	15.05%

学生の社会性・職業倫理に関わる質問 15～21 の分析についてまとめると，農林業･農山村体験を通じて，社会人として今後働く上で，自身のやりたいことだけをやるのではなく，組織やコミュニティの中で必要とされる重要な仕事を判断し，逃げずに取り組む姿勢を獲得したものと思われる。

４）　農林業・農山村に関わる分析

アンケート質問項目 22～32 については，農林業・農山村への考え方に関するものを尋ねた。直前アンケートでは，「因子１　農林業及び関連産業就業・農山村貢献欲求」,「因子２　農林産物の生産方法重視」,「因子３　農林業･農山村理解・貢献欲求」が抽出された（第 31 表，第 32 表）。いずれの因子でも国内の農林業・農山村を支持し，積極的に関与したり，農産物を買いたいというものであった。

第 31 表　農林業・農山村についての考え方の変化を追うための因子分析（直前アンケート）

変　数	因子1	因子2	因子3
22農家・林業従事者になりたい	1.0125	0.0676	−0.2307
23農林業にかかわる仕事に就きたい	0.7623	−0.1285	0.2187
24農林業・農山村に役立つ活動をしたい	0.4877	−0.0652	0.4726
25食料・農林業・農山村に関する知識を得たい	0.1017	0.2439	0.5975
26農薬や化学肥料を使っていない農産物を食べたい	−0.0024	0.6324	−0.0956
27食料や木製品を買うときは、価格以外にも検討すべきことがあると思う	0.0395	0.8714	0.0502
28食料や木材はなるべく国内で自給した方がよいと思う	0.2863	0.3338	0.0916
29農林業と自然環境は共生できると思う	0.1725	0.0922	0.1949
30日本の農業生産・林業生産は必要であると思う	0.0137	−0.0503	0.2151
31日本の農林業は農山村コミュニティと強く結び付いていると思う	−0.1245	0.1735	0.2992
32日本の農山村は必要であると思う	−0.1170	0.4443	0.1370

N=100 主因子法，プロマックス回転（H25～H27 アンケート．Ｒ・Ｓ・Ｔグループ）．

第 32 表　質問 22～32 抽出因子（直前アンケート）

	因子名	寄与率
因子1	農林業及び関連産業就業並びに農山村貢献欲求	25.77%
因子2	農林産物の生産方法重視	19.69%
因子3	農林業･農山村理解･貢献欲求	10.91%

質問 22～32 の直後アンケートからは，「因子１　農林産物の生産方法及び国内農林業重視」，「因子２　農林業及び関連産業就業欲求」，「因子３　農林業・農山村貢献欲求」の３つの因子が現れた（第 33 表，第 34 表）。稲作を中心とした日本の農林業と農山村の維持には結びつきがあることを理解し，また現場で具体的な農林作業を見ることで，多少高くても安心できる国産農林産物を利用したいし，農山村は必要であるという考えになったと思われる。

第 33 表　農林業・農山村についての考え方の変化を追うための因子分析（直後アンケート）

変　数	因子1	因子2	因子3
22農家・林業従事者になりたい	−0.1216	0.9306	0.0423
23農林業にかかわる仕事に就きたい	0.0305	0.8044	0.0488
24農林業・農山村に役立つ活動をしたい	0.0042	0.1383	0.6708
25食料・農林業・農山村に関する知識を得たい	0.0734	−0.0170	0.8658
26農薬や化学肥料を使っていない農産物を食べたい	0.5324	−0.2895	0.0929
27食料や木製品を買うときは、価格以外にも検討すべきことがあると思う	0.7703	−0.1450	−0.0556
28食料や木材はなるべく国内で自給した方がよいと思う	0.5414	0.1948	0.1128
29農林業と自然環境は共生できると思う	0.5608	0.1640	0.1043
30日本の農業生産・林業生産は必要であると思う	0.7887	0.2663	−0.1560
31日本の農林業は農山村コミュニティと強く結び付いていると思う	0.5399	−0.0227	0.1418
32日本の農山村は必要であると思う	0.6024	−0.0940	0.0302

N=96 最尤法，プロマックス回転（H25～H27 アンケート．Ｒ・Ｓ・Ｔグループ）．

第 34 表　質問 22～32 抽出因子（直後アンケート）

	因子名	寄与率
因子1	農林産物の生産方法及び国内農林業重視	37.63%
因子2	農林業及び関連産業就業欲求	18.67%
因子3	農林業･農山村理解･貢献欲求	9.20%

質問 22～32 の 1 ヵ月後アンケートからは，「因子１　国内農林産物を重視し農林業・農山村に貢献欲求」,「因子２　農林業及び関連産業就業並びに農山村貢献欲求」,「因子３　農林産物の生産方法重視」の３つの因子が抽出された（第 35 表，第 36 表）。

国内農林業や農山村に貢献しようという考えが，農林業・農山村体験前から強く意識されており，農林業・農山村体験後，１ヵ月後も考えが継続した。

第 35 表　農林業・農山村についての考え方の変化を追うための因子分析（一ヵ月後アンケート）

変　数	因子1	因子2	因子3
22農家･林業従事者になりたい	−0.0789	0.7453	−0.0153
23農林業にかかわる仕事に就きたい	−0.0910	0.9711	0.0082
24農林業･農山村に役立つ活動をしたい	0.5460	0.4427	−0.1453
25食料･農林業･農山村に関する知識を得たい	0.3077	0.2896	0.2388
26農薬や化学肥料を使っていない農産物を食べたい	−0.1215	−0.0738	0.8115
27食料や木製品を買うときは、価格以外にも検討すべきことがあると思う	0.1402	−0.0432	0.6745
28食料や木材はなるべく国内で自給した方がよいと思う	0.3225	0.1094	0.4694
29農林業と自然環境は共生できると思う	0.4094	0.0906	0.2770
30日本の農業生産･林業生産は必要であると思う	0.6090	0.0578	0.2514
31日本の農林業は農山村コミュニティと強く結び付いていると思う	0.7778	−0.1707	−0.0864
32日本の農山村は必要であると思う	0.8024	−0.0762	0.0549

N=82 主因子法，プロマックス回転（H25～H27 アンケート．Ｒ・Ｓ・Ｔグループ）.

第 36 表　質問 22～32 抽出因子（1 ヵ月後アンケート）

	因子名	寄与率
因子1	国内農林産物を重視し農林業･農山村に貢献欲求	42.86%
因子2	農林業及び関連産業就業並びに農山村貢献欲求	15.66%
因子3	農林産物の生産方法重視	9.57%

質問 22～32 の因子分析をまとめると，直前のアンケートではどの因子にも含まれなかった「30 日本の農業生産・林業生産は必要であると思う」,「31 日本の農林業は農山村コミュニティと強く結び付いていると思う」の項目が，農林業・農山村体験後，１ヵ月後には因子１「国内農林産物を重視し農林業･農山村に貢献欲求」（黄色）を形成した。現場での作業や農家との交流を通じて，職業や産業としての農林業や農山村を理解し，その必要性を感じたものと思われた。

農林業に関わる仕事への就業有無について聞いた質問項目 22 と 23，農林業･農山村への

関心や貢献意欲について聞いた質問項目 24 と 25 に関しては，質問項目「22 農家・林業従事者になりたい」,「23 農林業に関わる仕事に就きたい」,「24 農林業・農山村に役立つ活動をしたい」を持つ「農林業及び関連産業就業並びに農山村貢献欲求」因子（水色）において, 寄与率が徐々に下がっていくものの（25.77%→18.67%→15.66%）継続して現れ続けた。

農林産物の生産方法を問う質問項目（26～28）に関しては，直前のアンケートから直後，一ヶ月後にいたるまで常に重視される項目として因子を構成し，価格の安さだけではなく，農薬や化学肥料などを控えた国産の農林産物を求める一定の因子が存在した。

国内農林業・農山村の必要性を問う質問項目（29～32）に関しては，直前アンケートでは質問 32 を除き重視されていなかったが，直後及び一ヵ月後のアンケートでは常に重視され因子を構成した。農林業･農山村体験活動を経て，国産材供給等の点で日本の農林業･農山村の必要性に関する理解が得られたものと思われた。

農林業・農山村体験による効果の継続性を見るという点では，因子得点が参考になることもある。ここで，学生全体の因子得点の総和は常に０で，相対尺度であるため，各学生の個々人の思いがどれだけ強くなった・否定的になったというような絶対的な判断はできず，グループ内での相対的な位置づけであることに注意する必要がある。

平成 25 年度の調査対象である A 大学 R・S グループ学生の，質問９～16 で抽出した因子「非交流・物質主義」に関する因子得点を見ると，各学生の得点が，農林業・農山村体験直前のアンケートでは０近傍に集中していたが, 直後, 1 ヵ月後と進むにつれ上下にバラけ, 各自の嗜好が明確になっていったことを示した（第 37 表，第 24 図）。これは第 24 図の分布と第 37 表の分散値の値から見ることができる。

非交流・物質主義因子得点が最初に非常に高かった学生５，学生 13 や学生 21 は，農林業・農山村体験後にその値が低くなったり逆転し，農林業・農山村の魅力を感じることがあったのかもしれないが，1 ヵ月後にはまたもとの得点や元と同じ符号となった。

またやや高かった学生 20，学生 15，学生７，学生 19 や学生３のうち，学生７は農林業・農山村体験直後，１ヶ月後と値が徐々に下がりマイナスとなり，農林業・農山村の魅力を学生グループ全体の中で相対的にプラスに捕らえるようになった。一方で学生 20, 学生 15, 学生 19 や学生３は，農林業・農山村体験後，そして 1 ヵ月後と値が徐々に高くなったり，直前より常に高い値を示した。

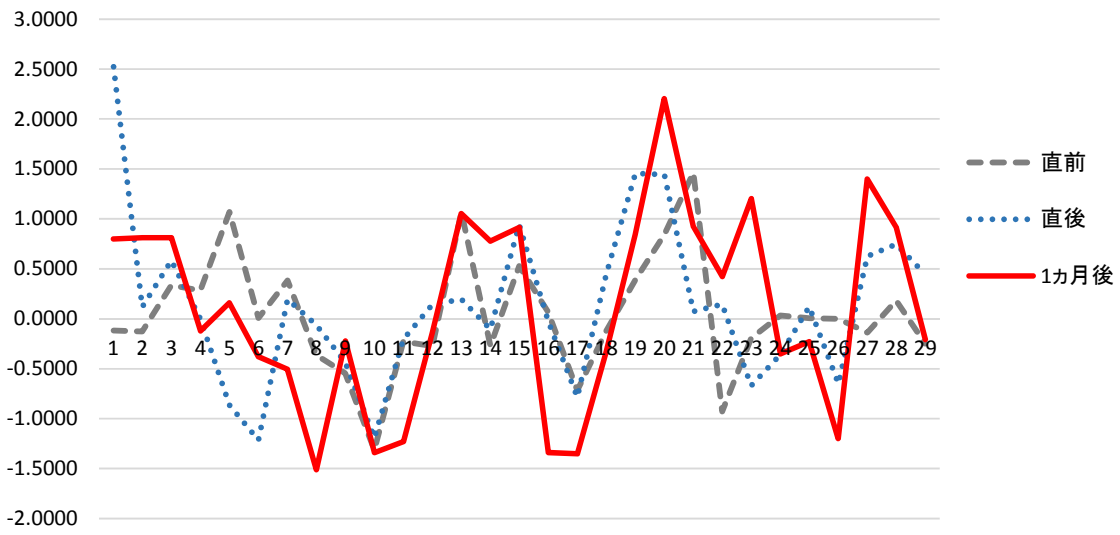
逆に非交流・物質主義因子得点が最初に低い学生８，学生９，学生 10，学生 17、学生 22 は，学生 22 を除き，農林業・農山村体験後に値がやや小さくなるがマイナスのままで，1 ヵ月後にもマイナスのままであった。学生８，学生 10 と学生 17 に関しては参加前よりマイナスの値が大きくなった。

全体的な傾向としては，直前，直後，１ヵ月後とアンケートを経るにつれ,「非交流･物質主義」に関してあやふやでどちらでもよい価値観を持っていた学生の考えが，好きか嫌いか両極に明確化していったようであった。また，農林業・農山村体験が，価値観を 180 度変えるというよりは，今まで漠然としていた価値観が明確になるという場合の方が多い

ことが示唆された。

第 37 表　質問 9 ～16 の非交流・物質主義因子に関わる H25 年度学生 29 名（R・S グループ）の因子得点の変遷

		直前	直後	1ヵ月後
R グループ	1	−0.1166	2.5236	0.7990
	2	−0.1271	0.1188	0.8122
	3	0.3353	0.5839	0.8122
	4	0.2822	−0.0006	−0.1223
	5	1.0699	−0.8624	0.1594
	6	0.0082	−1.2150	−0.3790
	7	0.3855	0.1947	−0.5033
	8	−0.3623	−0.0623	−1.5108
	9	−0.5451	−0.4341	−0.2216
	10	−1.3130	−1.1900	−1.3383
	11	−0.2286	−0.2074	−1.2299
	12	−0.2738	0.1421	−0.1434
	13	1.0675	0.1937	1.0525
	14	−0.2701	−0.1039	0.7779
	15	0.5277	0.9400	0.9158
S グループ	16	0.0677	−0.0239	−1.3394
	17	−0.7168	−0.7852	−1.3523
	18	−0.1189	0.4463	−0.3288
	19	0.3919	1.4545	0.8432
	20	0.8426	1.4433	2.2026
	21	1.4633	0.0731	0.9241
	22	−0.9286	0.1449	0.4240
	23	−0.1952	−0.6698	1.2037
	24	0.0334	−0.3592	−0.3503
	25	0.0046	0.1215	−0.2296
	26	−0.0024	−0.6494	−1.1975
	27	−0.1398	0.6260	1.3984
	28	0.1828	0.7448	0.9158
	29	−0.2480	0.4450	−0.2085
	分散	0.350	0.655	0.948



第 24 図　質問９～16 の非交流・物質主義因子に関わる直前・直後・１ヵ月後アンケートの因子得点（H25 年度学生 29 名）

（３）　個々の学生を追跡した変化（bonferroni 検定等）

（２）の因子分析ではグループ全体の変化を見たが，ここでは，個別の学生毎の農林業・農山村体験前後の変化について分析する。Ｒ・Ｓ・Ｔグループの非農学部生には，同一対象に反復測定をした３回の平均値の差の検定（分散分析）を実施し，有意な差があればその後に，各々２つの測定ペア計３セットで有意差を検定（Bonferroni の検定）した。

一方，農学部生のＺグループには，反復測定をした２回について，対応のある t 検定を実施した。

分析結果を見るとＲ・Ｓ・Ｔグループでは多くの項目で変化が見られた（第 38 表）。まず分散分析による直前･直後・１ヵ月後のデータ間の検定では，全 32 質問のうち６つを除き有意に変化が見られた。この分析では，データ間に有意な違いがあることがわかるが，どのデータとどのテータが有意に異なるのかがわからないため，次に３つの組み合わせ（直前と直後，直前と１ヵ月後，直後と１ヵ月後）それぞれで Bonferroni の平均値の差の検定を実施した。

結果は表 38 のとおりだが，特に農林業･農山村体験前後で考え方に変化があり，それが１ヵ月後も継続しているパターンは，直前と直後及び直前と１ヵ月後に有意な差があり，直後と１ヵ月後には有意差がないというものである。表 38 では，質問２，質問８，質問 16，質問 18～20，質問 22～24，質問 27～29，質問 32 の計 13 個が該当した。

同じような変化を示したものに質問４と質問 31 があり，直前と直後及び直前と１ヵ月後に有意な差があり，加えて直後と１ヵ月後にも有意な差があった。これは，農林業･農山村体験前後で考え方に変化があり，それが１ヵ月後も継続しているが，効果は体験直後よりも下がっているというものである。

また，農林業･農山村体験前後で考え方に変化があったが，１ヵ月後には元に戻ってしまったパターンは，直前と直後に有意な差が見られるが，直前と１ヵ月後には有意な差が見られず，直後と１ヵ月後に有意な差があるというものである。これは質問３，質問６，質問７，質問 11，質問 13，質問 25，質問 30 の計７つが該当した。

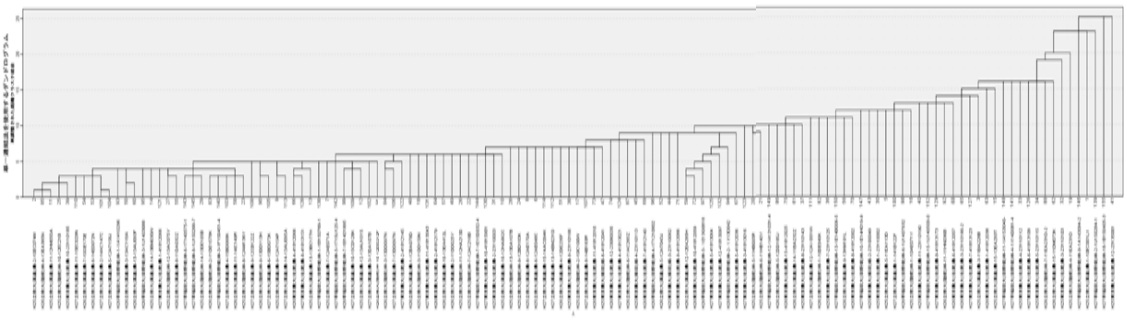
Ｚグループは体験前後の変化が比較的乏しく，有意に変化が見られたのは，32 個の質問を通じて質問「５　農産物を作ったり木を育てる大変さがわかると思う」「６　農家や林業従事者が抱える農林業に関する悩みが理解できると思う」「８　訪問先に魅力を感じると思う」「18　地道な仕事の積み重ねが，大きな成果に結びつくと思う」「31　日本の農林業は農山村コミュニティと強く結び付いていると思う」の５つであった。

また，ＲＳＴグループとＺグループの学生の，農林業・農山村体験前及び農林業・農山村体験後の回答をもとに，意味のあるグループにクラスター分析を試みた。最近隣法（第 25 図），Ward 法，重心法などを用いたが，明確にグループ化することができなかった。その理由として，強制参加のＺグループでは，参加の意欲が強い学生，単位取得の一環として淡々と参加する学生，意欲が低い学生とが万遍なく存在している可能性があり，クラスター分析でも特徴なく普遍的な散らばり方を示した。

第 38 表　質問 1 ～32 における，R・S・T グループ，Z グループの平均値の差の検定

		グループ	観測平均値 直前	観測平均値 直後	観測平均値 1月後	反復測定による変化（分散分析）	平均値の差の検定(Bonferroni又はt検定) 直前－直後	平均値の差の検定(Bonferroni又はt検定) 直前－1ヶ月後	平均値の差の検定(Bonferroni又はt検定) 直後－1ヵ月後
1	自身の視野が広がると思う	RST	5.34	5.53	5.46	有意差なし	有意差なし	有意差なし	有意差なし
		Z	5.18	5.13	-	-	有意差なし	-	-
2	自身の成長ができると思う	RST	4.97	5.25	5.29	＊＊	＊	＊＊	有意差なし
		Z	4.85	4.93	-	-	有意差なし	-	-
3	大学で学んでいる専門分野の理解につながると思う	RST	3.95	4.37	4.12	＊＊	＊＊	有意差なし	＊
		Z	4.77	4.67	-	-	有意差なし	-	-
4	将来の就職活動や就職先で役立つと思う	RST	4.09	4.87	4.55	＊＊	＊＊	＊＊	＊
		Z	4.40	4.48	-	-	有意差なし	-	-
5	農産物を作ったり木を育てる大変さがわかると思う	RST	5.39	5.68	5.57	＊	有意差なし	有意差なし	有意差なし
		Z	5.05	5.48	-	-	＊	-	-
6	農家や林業従事者が抱える農林業に関する悩みが理解できると思う	RST	4.59	5.05	4.79	＊＊	＊＊	有意差なし	＊
		Z	4.60	4.98	-	-	＊	-	-
7	自身の生活と農林業・自然との結びつきが理解できると思う	RST	4.68	5.21	4.82	＊＊	＊＊	有意差なし	＊＊
		Z	4.40	4.60	-	-	有意差なし	-	-
8	訪問先に魅力を感じると思う	RST	4.99	5.67	5.58	＊＊	＊＊	＊＊	有意差なし
		Z	4.40	4.93	-	-	＊＊	-	-
9	物事に無心になって取り組むことは大切だと思う	RST	5.15	5.18	5.24	有意差なし	有意差なし	有意差なし	有意差なし
		Z	5.00	4.88	-	-	有意差なし	-	-
10	様々な世代の人との交流を通じ、地域コミュニティを支えることは重要	RST	5.41	5.67	5.56	＊	＊	有意差なし	有意差なし
		Z	5.23	5.25	-	-	有意差なし	-	-
11	スマホやインターネットがなければ生活できない	RST	3.77	3.29	3.63	＊＊	＊＊	有意差なし	＊
		Z	4.23	4.23	-	-	有意差なし	-	-
12	幸せは農山村よりも都市にいることで実感できると思う	RST	3.05	2.81	3.01	有意差なし	有意差なし	有意差なし	有意差なし
		Z	3.40	3.63	-	-	有意差なし	-	-
13	幸せは物を持つことで実感できると思う	RST	3.13	2.75	3.20	＊＊	＊＊	有意差なし	＊＊
		Z	3.60	3.63	-	-	有意差なし	-	-
14	幸せは人とのつながりで実感できると思う	RST	5.23	5.45	5.35	＊	＊	有意差なし	有意差なし
		Z	5.05	5.15	-	-	有意差なし	-	-
15	誇りを持てる仕事に就きたいと思う	RST	5.37	5.55	5.54	有意差なし	有意差なし	有意差なし	有意差なし
		Z	5.13	5.33	-	-	有意差なし	-	-
16	仕事を通じて、他人の生活を豊かにしたいと思う	RST	5.05	5.30	5.29	＊＊	＊	＊	有意差なし
		Z	4.60	4.78	-	-	有意差なし	-	-
17	工夫して仕事をすると、つまらないと思ったことも楽しくなると思う	RST	4.98	5.11	5.15	有意差なし	有意差なし	有意差なし	有意差なし
		Z	4.76	5.12	-	-	有意差なし	-	-
18	地道な仕事の積み重ねが、大きな成果に結びつくと思う	RST	5.11	5.51	5.38	＊＊	＊＊	＊＊	有意差なし
		Z	5.00	5.28	-	-	＊	-	-
19	自分と異なる価値観を認められれば、自分の考え方が広がると思う	RST	5.19	5.62	5.57	＊＊	＊＊	＊＊	有意差なし
		Z	5.04	5.08	-	-	有意差なし	-	-
20	仕事はその過程（プロセス）にも楽しさがあると思う	RST	5.06	5.38	5.47	＊＊	＊	＊＊	有意差なし
		Z	4.80	5.08	-	-	有意差なし	-	-
21	自分のやりたい仕事ができなければ意欲がわかない	RST	3.98	3.91	3.89	有意差なし	有意差なし	有意差なし	有意差なし
		Z	4.16	4.36	-	-	有意差なし	-	-
22	農家・林業従事者になりたい	RST	2.87	3.30	3.21	＊＊	＊＊	＊＊	有意差なし
		Z	3.28	3.43	-	-	有意差なし	-	-
23	農林業にかかわる仕事に就きたい	RST	3.14	3.70	3.70	＊＊	＊＊	＊＊	有意差なし
		Z	3.73	3.93	-	-	有意差なし	-	-
24	農林業・農山村に役立つ活動をしたい	RST	4.09	4.67	4.46	＊＊	＊＊	＊＊	有意差なし
		Z	4.00	4.25	-	-	有意差なし	-	-
25	食料・農林業・農山村に関する知識を得たい	RST	4.91	5.29	4.99	＊＊	＊＊	有意差なし	＊＊
		Z	4.85	4.95	-	-	有意差なし	-	-
26	農薬や化学肥料を使っていない農産物を食べたい	RST	4.88	5.13	4.95	＊	有意差なし	有意差なし	有意差なし
		Z	4.35	4.00	-	-	有意差なし	-	-
27	食料や木製品を買うときは、価格以外にも検討すべきことがある	RST	5.01	5.38	5.22	＊＊	＊＊	＊	有意差なし
		Z	4.80	4.78	-	-	有意差なし	-	-
28	食料や木材はなるべく国内で自給した方がよいと思う	RST	4.89	5.21	5.24	＊＊	＊＊	＊＊	有意差なし
		Z	4.85	5.00	-	-	有意差なし	-	-
29	農林業と自然環境は共生できると思う	RST	5.01	5.50	5.36	＊＊	＊＊	＊＊	有意差なし
		Z	4.85	4.88	-	-	有意差なし	-	-
30	日本の農業生産・林業生産は必要であると思う	RST	5.30	5.72	5.51	＊＊	＊＊	有意差なし	＊＊
		Z	5.15	5.35	-	-	有意差なし	-	-
31	日本の農林業は農山村コミュニティと強く結び付いていると思う	RST	4.79	5.63	5.43	＊＊	＊＊	＊＊	＊
		Z	4.30	4.80	-	-	＊	-	-
32	日本の農山村は必要であると思う	RST	5.34	5.68	5.61	＊＊	＊＊	＊	有意差なし
		Z	5.13	5.35	-	-	有意差なし	-	-

注．＊：５％有意，＊＊１％有意．R・S・T グループは緑色の＊が有意．Z グループは青色の＊が有意．



第 25 図　学生のクラスター分析（最近隣法）

農学部学生の，農林業･農山村体験前後の解答の変化が比較的乏しいことについては，学生にとっての既知の事実・体験の確認であったり，非自主的参加による主体性の問題があることが考えられた。クラスター分析からは，Ｚグループを構成する農学部生特有のグループ化はできなかった。

（４）　農林業・農山村体験学生の希望職種の変化

農林業･農山村体験に参加した学生グループ R・S・T が，体験前と体験 1 ヵ月後で，希望する職種に変化があるのかをアンケートし検定した（χ２乗検定）（第 39 表）。その結果，体験前後で，希望職種に有意な差は見られなかった（第 40 表）。事前の予想では，農林水産業（20 番）や地域貢献（14 番）への回答が増加すると予想したが，そのようなことはなく，そもそも農林水産業や地域貢献に多少なりとも関心のある学生が農林業･農山村体験に参加するために集まっていたと思われた。

第 39 表　農林業･農山村体験に参加した学生の希望職種（体験前と体験１ヵ月後）

	1.エンターテイメント	2.クリエイティブ	3.美容・ファッション	4.コンピュータ	5.サービス	6.建築・インテリア	7.旅行	8.出版	9.モノづくり	10.乗り物	11.インフラ整備
農林業体験（直前）	1(1.1%)	2(2.2%)	0(0.0%)	1(1.1%)	6(6.7%)	2(2.2%)	10(11.2%)	2(2.2%)	3(3.4%)	5(5.6%)	5(5.6%)
農林業体験（1ヵ月後）	0(0.0%)	3(5.0%)	1(1.7%)	2(3.3%)	4(6.7%)	0(0.0%)	4(6.7%)	1(1.7%)	2(3.3%)	2(3.3%)	6(10.0%)

	12.医療・健康・福祉	13.冠婚葬祭	14.国や地域に貢献	15.海外貢献	16.自然・動物	17.食・料理	18.語学・教育	19.資産・金融	20.農林水産業	21.その他	計
農林業体験（直前）	5(5.6%)	1(1.1%)	16(18.0%)	5(5.6%)	4(4.5%)	8(9.0%)	2(2.2%)	3(3.4%)	5(5.6%)	3(3.4%)	89
農林業体験（1ヵ月後）	2(3.3%)	1(1.7%)	9(15.0%)	3(5.0%)	3(5.0%)	3(5.0%)	5(8.3%)	3(5.0%)	3(5.0%)	3(5.0%)	60

第 40 表　農林業･農山村体験に参加した学生の希望職種の有意差検定結果

独立性の検定　　**:1%有意 *:5%有意

カイ二乗値	自由度	Ｐ 値	判 定
12.1788	20	0.9098	

（５）　農林業・農山村体験学生と一般学生との比較

希望職種に関して，農林業･農山村体験に参加する学生は特別な属性を持っているの

か，農林業・農山村体験学生(R・S・T グループ 137 名)とＡ大学の一般教養の授業を受ける学生とで比較を行った。この学生は，春学期に全 14 回で開催される講義『「耕す知」と「共生」の探求』という授業を受講する学生で，授業内容は，「子どもの貧困と地域支援」，「老人福祉，高齢者介護」，「東日本震災復興と町づくり」といったテーマで毎回様々な人物をゲストとして招き講義を聴くというものである。

A 大学の R・S グループ及び B 大学の T グループを合わせて，A 大学の一般教養課程を受講する学生と比較することは，農林業･農山村体験学習に関心を持ち，自主的に農林業･農山村体験に参加する非農学部学生と，農林業･農山村に関心を持つ学生も中には存在するが大多数が関心を持っていない非農学部学生全体とを比較するという意味を持っている。

アンケートは，6 月中旬の「老人福祉，高齢者介護」の講義後に実施した（N=157）。この時点までの講義で，農林業に関するテーマは一度も実施されていなかった。また講義には，A 大学の R グループや S グループの活動にかつて参加した学生が 1 名含まれていた。学生は 1 年生 36 名，２年生 53 名，３年生 55 名，４年生 10 名で，全 10 学部の内，キャンパスが遠い 1 学部を除き 9 学部からの出席があった。結果は農林業・農山村体験参加学生と比較した（独立性の検定と残差分析）。

独立性の検定からは，２つのグループが有意に異なる結果となり，農林業・農山村体験に参加する学生の希望職種は，Ａ大学の全般的な学生と異なることが明らかとなった（第 41 表）。

第 41 表　農林業・農山村体験学生（R・S・T グループ）とＡ大学学生の希望職種に関する独立性の検定

独立性の検定			**:1%有意 *:5%有意
カイ二乗値	自由度	Ｐ 値	判 定
64.0553	20	0.0000	**

次に，それぞれのグループの解答項目のどのペアが有意に異なるのかを残差分析により調べた（第 42 表）。Ａ大学は都心にあり農学部はないが，文系・理系の 10 以上の学部を持ち，学部学生数が 1 万人を超える総合大学であり，また 8 ～ 9 割程度の学生が 1 都 4 県で生まれ，自宅で家族と同居し通学する学生である。そのような学生の希望する職種と比較した場合に，農林業・農山村体験参加学生の希望職種は，特に国や国内地域への貢献に関心が高く，具体的には農林水産業，食・料理，自然や動物といったものへの就職に有意に関心が高かった。一方で，Ａ大学全般の学生は，海外貢献，語学，クリエイティブ産業，マスコミ（エンターテイメント，出版），美容･ファッションなどへの就職に有意に関心が高かった。

第 42 表　農林業・農山村体験参加学生（R・S・T グループ）とＡ大学学生間の希望職種で有意に異なる項目

	1.エンターテイメント	2.クリエイティブ	3.美容・ファッション	4.コンピュータ	5.サービス	6.建築・インテリア	7.旅行	8.出版	9.モノづくり	10.乗り物	11.インフラ整備
農林業体験	3(2.2%)	5(3.6%)	1(0.7%)	3(2.2%)	11(8.0%)	3(2.2%)	13(9.5%)	3(2.2%)	5(3.6%)	7(5.1%)	6(4.4%)
A大学一般	23(6.2%)	29(7.9%)	17(4.6%)	4(1.1%)	30(8.1%)	11(3.0%)	33(8.9%)	21(5.7%)	15(4.1%)	5(1.4%)	7(1.9%)

	12.医療・健康・福祉	13.冠婚葬祭	14.国や地域に貢献	15.海外貢献	16.自然・動物	17.食・料理	18.語学・教育	19.資産・金融	20.農林水産業	21.その他	計
農林業体験	6(4.4%)	1(0.7%)	18(13.1%)	7(5.1%)	8(5.8%)	16(11.7%)	3(2.2%)	3(2.2%)	11(8.0%)	4(2.9%)	137
A大学一般	7(1.9%)	2(0.5%)	29(7.9%)	45(12.2%)	9(2.4%)	19(5.1%)	33(8.9%)	19(5.1%)	6(1.6%)	5(1.4%)	369

注．灰色に塗りつぶしのセルはＡ大学一般教養講義受講学生の方が有意に希望が多いことを，点で塗りつぶしのセルは，農林業・農山村体験学生の方が有意に希望が多いことをあらわす．

（６）　聞き取り調査による農林業体験活動の制約と卒業後の就業状況

これまで見てきた学生の変化には「農林業・農山村に役立つ活動がしたい」，「農林業に関わる仕事に就きたい」，「農家･林業従事者になりたい」，「食料や木製品を買うときは，価格以外にも検討すべきことがあると思う」など，わが国の農林業・農山村を積極的に支援する部分での学生のポジティブな変化があった。では実際に，農林業・農山村体験後に学生は農林業・農山村に関連する職業に就くのであろうか。

R・S・T グループに他の農林業・農山村体験活動を行うグループを加え，就職状況や農林業・農山村体験活動をする上での制約などをヒアリング調査した。ヒアリングは，グループの部長もしくは大学担当者に行い，主に 2013 年と補足調査を 2014 年，2015 年に実施した。

ヒアリング対象としたグループの基準は，大学から自費で旅行し，農山村住民と交流しながら，大学の単位取得等の義務的な目的を持たず，自主的に農林業・農山村体験活動を実施している団体とした。結果は第 44 表にまとめた。

農業関連

１．関東の大学自主プログラム R

２．関東の大学サークル U

３．関東インカレサークル V

４．関東の大学サークル W

５．関西の大学サークル X

６．中部のサークル Y

林業関連

７．関東の大学自主プログラム S

８．関東の大学サークル T

参加学生の学部は，グループ X を除き，農学部以外で殆どを占めていた。学生はどのグループも近年増加傾向にあり，援農先の圃場や受け入れ農家などの関係で，学生

全員が必ずしも農林業・農山村体験活動に参加できないグループ V や，学生数が増えすぎて入会を断っているグループ U などが存在した。

参加動機としては，「農林業に関心がある」，「ＴＶなどのマスコミの影響で農林業に関心を持った」，「農業をやってみたい」，「都会の疲れを癒したい」，「野菜の成長を見たい」，「変わったことをやりたい」，「さまざまなところへ行けることに魅力を感じて」などが挙げられ，農林業関連への就職や農山村への移住等を考えて参加している学生はほとんど見られなかった。

一方で卒業後には，様々な形で農林業・農山村関連企業への就職・就農に結びついていた。各グループの部長・幹事長などに直近での就職先として覚えているものだけを挙げてもらったので，すべてを網羅しているわけではないが，JA，生活協同組合，農業生産法人へ多数が就職しており，また商社の農林水産業部門，食品会社，政府系農林水産金融機関，住宅会社，製紙会社等で，BtoB のビジネスを行う組織へも就職していた。加えて，そのような会社・団体に就職後に脱サラして就農している者も数名存在した。また，農林業・農山村体験で訪れた農山村が気に入り，教員・役場職員・医療系職員などとしてＩターンする例も多数存在した。

加えて，農林業・農山村関連で就職した・しないに関係なく，卒業後に援農先での援農，農産物購入やお祭り開催の手伝いなどを継続し，OB・OG と農林家・農山村，OB・OG と学生のつながりが続いていることが多かった。

一方で，活動を継続する上での課題として以下の第 43 表にあるものが挙げられた。

第 43 表．農林業･農山村体験活動において学生グループ側が抱える課題

課題	該当したヒアリング調査対象グループ	聞き取りの例
1 金銭的制約から活動を抑制	３，４，５，６，８	「制約がなければいくらでも行きたい」
2 援農先農家が少なく，学生が多すぎて学生に十分な作業量が確保できない	２，３，４，６	「ひとり畳１枚分くらいしか田植えできない」
3 タイミングのミスマッチ	３，４，５，６	農家に人手が欲しい時に学生が来られず，人手がいらない時に学生が大勢来る
4 専業農家に受け入れてもらえない	３	「単純労働力が欲しい」⇔「農山村・農林業全体を体験したい」

以上をまとめると，当初の参加動機は，「非日常生活への関心」，「食・農林業，農山村に住む人への関心」というようなもので，特段就職や移住に結びつけるような動機で参加しているわけではないが，農林業･農山村体験後には，農林業･農山村に関連する団体・会社等へ就業していた。ヒアリング調査からは，その数は，JA などの農林水産業界と農産物の六次産業化を行っている農業生産法人などの BtoC のビジネスを行う組織全体で学生数の５％程度，これに加え，建築資材を扱ったり，食材を製造・卸したりする大手商社・食品メーカー等の BtoB のビジネスを入れるとさらに２～３％の学生が就業していた。また，就職先として，訪問先の市町村等へ役場職員などでＩターンする学生も１～２％存在した。

第 44 表　アンケート及びヒアリング調査対象グループの概要（１／３）

団体名（拠点）	主な活動地域	活動要約	学生の所属学部	活動内容
1. 団体R（関東）	東北の農山村	農業体験	社会学部　経済学部　理学部　観光学部等	1990年に始まっており、事前に訪問地域の学習をし、プログラム中は地域の人たちの自宅に宿泊したり、農林業の作業を手伝ったりしながら、さまざまな地域交流を行う。また帰京後には大学内での訪問先の農作物販売を行う。
2. 団体U（関東）	大学周辺の地域と農家	援農、農産物販売、学食で提供、農業体験等	工学部・情報科学部・理工学部・生命科学部	学生達の農業や野菜への関心の低さ、また、農家の高齢化や後継者不足などの問題を解決する手段として、農業を通して地域と大学の交流を深め、交流の橋渡しになる。「おいしく、心あたたまる野菜が食べたい」をテーマとし、農業・地域・大学の連携作りを目指して以下のような活動を実施。 ・地元の野菜を栽培し学祭やファーマーズマーケットに出店 ・大学での焼きいも大会 ・農家援農 ・堆肥作り ・地元農作物の大学食堂への導入 ・地域交流（バーベキュー）
3. 団体V（関東）	関東の農山村	農家研修、生産・加工、販売・イベント	首都圏の様々な大学	「農業の現場で学び、地域に貢献する農業サークル」をモットーに、首都圏の大学生が以下の活動を実施。 1　農家研修（農家で援農） 2　生産・加工（自分たちで一から農産物生産や加工） 3　販売・イベント（都会の方々に地域や農業を発信） また、週に一度のミーティングで農学全般や有機農業、野菜の作り方などを勉強。
4. 団体W（関東）	関東の地方都市	農作業の体験実習、地域住民等との交流、研究	社会科学部　教育学部　政治経済学部　理工学部等	・大学構内で農作物栽培 ・関東の地方都市で月一の援農 ・農村等における農作業の体験実習合宿 ・農業を通じた他団体及び地域住民との交流 ・食料・農業・農村に関する研究発表 等
5. 団体X（関西）	全国各地	農業体験、販売等	農学部　工学部　文学部　理学部　保健学部 周辺の様々な大学	普段の勉強では触れることができない現実の農業を体験し、考えることを目的に、日本全国の農家の援農活動を実施。 活動は長期休暇や週末を利用したり、平日には、借りている圃場でのイチゴの栽培＆販売等。 農作業をすることだけでなく、農家の話を聞き、一緒にご飯を食べ、一緒に生活する中で、実際に農業の現場にいる人たちと接する・話す・コミュニケーションを取るという農業体験の方針。
6. 団体Y（中部）	中部の市町村	農業体験	農学部　人文学部　理学部　工学部等	地方都市での有機農家等の援農（水田の田植え・除草・収穫、アスパラ、スイカやリンゴの収穫等）と、農家の田んぼ・畑を借りて（8畝）の農作業。
7. 団体S（関東）	東北の農山村	林業体験	社会学部　経済学部　理学部　観光学部等	2003年に始まり、事前に訪問地域の学習をし、プログラム中は地域の人たちの自宅に宿泊したり、間伐作業を手伝ったり、蕎麦打ち体験をしたりと、さまざまな地域交流を行う。
8. 団体T（関東）	東北の農山村	林業体験・農業体験、地域交流、仲間との共同生活	文学部　教育学部　政治経済学部　法学部　理工学部等	年三回の長期合宿（1週間～3週間）を通じて村より借りている森の育林、一次産業体験（酪農、農業等）を通じた学びと手伝い、集団生活を通じた学び及び成長、並びに地域小学校等での交流活動。在京中も週一のミーティングで合宿の内容や大学祭の出店内容等を話し合う。また、活動費を稼ぐために各種助成団体の助成金や学内草刈りバイト等も行っている。 一般教養の授業に「農山村体験実習」があり、その実習先のとして来村し、この実習がきっかけで当会に来る学生もいる。

第 44 表　アンケート及びヒアリング調査対象グループの概要（２／３）

団体名（拠点）	活動頻度	活動資金獲得	学生の参加動機	設立	男女比（大学全体）	学年	所属数（人）
1. 団体R（関東）	現地5泊6日、事前事後ミーティング計3回、学祭販売	－（参加費を学生が自己負担）	農村地域の現状を肌で感じたい。外に出てみたい、農業の現場を知りたい、農家の気持ちを感じたとりたい、新しいことがしたい、田舎にいきたい、ゆっくりとした時間を過ごして自分を見つめなおしたい等	1990	2：3（48：52）	1～4年生	毎年15～18名参加
2. 団体U（関東）	メンバーで曜日を割り振り週5日援農。毎週ミーティング。その他学際等に参加	大学より補助(年間10万円)、学際での野菜販売	変わったことをやっているサークルに入りたい。好奇心。友人に誘われて。祖父母が住む田舎での印象的な生活を思い出して。植物医療で学んだ知識の実践の場（肥料条件を変えて、トマトの病気などを調べる授業）として。おいしい野菜が食べたい。	2009	2：1（9：1）	1～3年生。4年次は卒部。2012～2014年に急激に人数が増え学生数50名で制限中	50
3. 団体V（関東）	毎月1度＋夏休み＋農家のニーズのある土日の農家研修、毎週ミーティング	援農先の市のイベントやジャパンフードフェスタ等での商品販売	農業をやってみたい。自分で作ったものを食べたい等	2007	1：4	1～3年生。4年次は就活等のため実質的に卒部。	25
4. 団体W（関東）	週1のミーティング（長期休暇中を除く）と4月から秋まで週一のキャンパス内たんぼ当番、月一で援農、春と夏に農家合宿（作業なく実質的に旅行）等	大学及び大学ボランティアセンターより計年12万円の補助	田んぼをやりたい。緑が恋しい。サークルの落ち着いた雰囲気がいい。大学の授業で活動を知って関心を持った等。	2003	1：1（6：4）	1～3年。4年次引退。	30
5. 団体X（関西）	週1のミーティング、小グループに分かれ週末や長期休暇で全国各地に年間20回程度の援農（その中には夏と春の合宿含む）。地元で圃場を借りて平日に活動をするグループもある。	－（旅費を学生が自己負担）	実家が農業をやっている。農業に興味がある。全国さまざまなところへ行ける。友達に誘われて。活動日がちょうどよかった等	1994	3：2（73:26）	1～4年生。4年生は実質的に引退。	60以上
6. 団体Y（中部）	4～12月に週1回（土曜日）活動。毎回10～15人参加	大学より年約2万円補助、他は実費	農作業をしてみたい。自分で作ったものを食べたい、というのが殆ど。他に食セラピーに関心がある等。	1997	6：3（66：33）	1～4年生。4年生は実質的に引退。	70
7. 団体S（関東）	現地5泊6日、事前事後ミーティング計2回、現地のお祭り参加	－（参加費を学生が自己負担）	五感を通じて勉強したい、第一次産業を知りたい、自然が好き等	2003	2：3（48：52）	1～4年生	毎年15名程度参加
8. 団体T（関東）	年間3度の長期合宿、学園祭出店、週1度のミーティング等	大学キャンパスの除草アルバイト、各種助成金獲得、大学及び大学のボランティアセンターより計年12万円補助。加えて、合宿の際は各自実費負担	自然が好き。林業に興味がある。地方自治体に興味がある。TV番組を見て農山村に興味を持った。一次産業に興味があった。父が林業関係者、等。 入会後には村民との交流が楽しいと語る者が多い。	1967	11：9（6：4）	1～3年生。4年次は実質的に卒部。	40

第 44 表　アンケート及びヒアリング調査対象グループの概要（３／３）

団体名（拠点）	課題	特徴的な進路（現役部長にヒアリング）	所属学生のバックボーン
1. 団体R（関東）	大学の自由参加プログラムで、筆者からの課題のヒアリングは実施してない	食品メーカー、食品サービス業、援農先市町村で就職（7名）等	9割は関東在住の自宅通学生。
2. 団体U（関東）	特に近年、新入部員数が大幅に増加し、それに比べ先輩が少なく、適切な援農のための指導ができない	農業・食品関連メーカー、機械メーカー、JAやバイオ会社等	自宅生が9割で関東4県から通学している。一人暮らしは1割程度。実家が住宅地の学生が多いが、祖父母が農家という学生もいる。
3. 団体V（関東）	活動資金（交通費）がいつも足りない。援農先にはレンタカーで行くので、レンタカー代が高く、車の免許を持っていない学生も多いので、非常に行きづらい。 また現在3件の農家に援農しているが、学生が多くて作業がすぐ終わってしまうので、新たな援農先農家を開拓したい。	製紙会社及び政府系金融会社に就職後に退職し就農。他に、生協、JA、食肉加工会社、農業生産法人等	メンバーはほぼ関東4県在住。実家が農家の人が2、3人いる。農学部生は1名のみ。募集をせずとも様々な大学・学部から毎週のように入会希望者が見学にやってくる。25名という所属数は、いつも活動に来る人数で、全体としてはもっと多い。
4. 団体W（関東）	地方に援農に行くのは交通費がかかり大変。もっと頻繁に行きたい。	就農、食品会社等	地方の学生が多く、田や畑と身近に育った学生や、叔父が種子屋という人もいる。
5. 団体X（関西）	自分たちが行きたいときに行きたい農家さんにお世話になるので、あちらが人手が飽和している状況でお世話になっている時もあるにも関わらず、農家さんが人手を本当に必要としている時に人が集まらない状況が発生する。	JAや民間企業に就職後に退職し就農（部長が把握するだけで5名以上）。農林水産省等の公務員、教員、農家、JA、食品メーカー、飼料メーカー、化学メーカー、住宅メーカー、家具メーカー等	9割は下宿生で地方出身。関西方面出身者が多い。サークル設立当時は様々な学部の学生がいたが、今は農学部生が8割5分。家が農業をやっている学生もいる。
6. 団体Y（中部）	その日の作業に対して学生が多かったり少なかったりの人数調整が難しいが、総じて学生が多く作業量が少ない。 2年次に農学部はキャンパスが遠くに移り、他学部から遠くなるため、農学関係の講義や実習を受けたい他学部生は潜在的にいると思うが、農学関係の授業をほぼ受けられない。	就農（複数）、種苗会社、全酪連、JA、食品メーカー、農家レストラン、医者、市議等	中部出身の人が圧倒的に多く、次いで関西。地元の学生は殆どおらず、実家が農家の学生も殆どいない。
7. 団体S（関東）	大学の自由参加プログラムで、筆者からの課題のヒアリングは実施してない	援農先市町村に就職等	9割は関東在住の自宅通学生。
8. 団体T（関東）	遠くて費用がかかるので現地にあまり行けない。	農業系金融機関、農業系組織の旅行会社、農業機械会社、就農（農業、酪農業等）、援農先市町村に就職（役場等）等	自宅生9割で関東4県から通学。下宿生1割で、実家は、畑があり作業を手伝った経験がある人。当初は文学部や教育学部生が多かったが、最近では政経学部や法学部、理工学部等偏りなく入っている。

４．考察

小林他（2003）は，継続して６ヶ月間毎月１回のペースで農作業体験教室に参加する小学生へ，各参加後にアンケートを実施し，参加を通じて，徐々に農業を知る行動や観察，愛情表現などが増えてきたことを明らかにした。本調査では学生が合宿形式で，また，初めて経験する農林業・農山村体験を追跡して３度アンケート調査を実施したが，長期間継続して農林業・農山村体験をせずとも，１度の農林業・農山村体験において，一定程度の意識変化の効果が出る場合がある事を示した。

多炭他（2009）は，講義などの義務的参加よりも任意参加の学生の方が，農林業・農山村体験の教育効果を大きく見積もる傾向があることを示しており，本研究でも自主的に参加するR・S・Tグループの学生のほうが，ゼミの行事として参加したZグループの学生よりも，農林業・農山村体験後の効果が大きく見られ，１ヵ月後も継続した。

また，多炭他（2009）は，農村部出身学生より都市部出身学生の方が，農山村振興活動への参加を通して受ける教育効果が大きいことを報告している。本調査では，R・S・T・Zグループの学生の大半の８割程度が，周囲に田や畑のない住宅地域や商業地域で生まれ育っており，農林業・農山村体験前後の変化は，既存研究で示された，都市部出身学生の比較的大きな教育効果を示している可能性もある。

本調査で明らかにしたのは，自主的に農山村を訪れ，非日常である農林業を体験したり，農林業のことや農山村に住む人たちの考えを知ったり，地域の人たちと交流したりしたいという学生が，農学を専攻しない者の中に一定数おり，そのような学生が農林業・農山村体験を経て，自身の考え方を変化させていくというものであった。変化の内容は，農林業・農山村での経験を踏まえ自身と農林業・農山村との接点が何かを考え，将来農林業・農山村に役立ちたいという思い，社会人として今後働くうえで，他者と関わりあいながら他者の役に立つ仕事をしたいという思い，自身のやりたいことだけをやるのではなく，組織で仕事をする上で重要なことへの取り組みの姿勢の獲得，農林業そのものへの理解や農林産物の価格以外での購入判断の重要性，自己の適正判断，地域コミュニティへの貢献の必要性の自覚といったものであった。

本調査で明らかにしたような農林業・農山村体験をすることによる学生への教育効果は，一般的に行われるインターンシップによる職業体験などで得られる効果とは効果が異なるものである。一般的にインターンシップとは，学生が企業等において実習・研修的な就業体験をする制度で（文部科学省・経済産業省・厚生労働省，2015），これまで三省合意指針（文部科学省・厚生労働省・通商産業省，1997）のもとに進められ，受け入れ余力のある大企業を中心に年々参加学生が増加している（H23年度参加学生は62,561人（小林, 2013））。

インターンシップの学生への効果としては，「志望業界の理解」，「自己の適正理解」，「社会人としての基礎力育成」が挙げられており（文部科学省・厚生労働省・経済産業省，2015; 経済産業省，2012等），産業界のニーズにも対応した効果的インターンシップ実施の要件が整理されている（経済産業省，2012a，2012b，2013；日本経済団体連合会，2009；経済産業

省と特定非営利活動法人エティック，2014)。学生がインターンシップを経験することで，働くために必要な能力を認識したり（尾川・甲原，2015)，自分に自信がついたり（楠奥，2006)，就業意識の向上や職業理解，経験した職種への自身の適正理解が進んだり（平野，2010)，職業意識の育成，責任感・自立心の向上，適職の確認が進んだり（飛田（2008)），協調して働く大変さを理解したり（島田，2006)，インターンシップ期間が長くなるにつれ「働くことの意義を知る」,「自分の適性を判断できる」,「企業家を育成できる」等の効果を得たり（田中，2007）という調査結果があり，効果を大きく分けると，繰り返しになるが，先に述べた「志望業界の理解」,「自己の適正理解」,「社会人としての基礎力育成」が挙げられる。

一方で，農林業・農山村体験による効果としては，農林業・農山村・農林家の「理解」，農林業・農山村に関わる職業への「自己の適正理解」，雑草取りなどの地道な作業や水路などの集落共同施設の管理を通じた仕事を進める上での協調性の重要性などの「社会人としての基礎力の養成」，また，地域のコミュニティを維持していくために役に立ちたいという自覚や責任感といった「仕事を離れた部分での社会性の向上」，消費者の視点で農林産物を選ぶ際に，自然環境への負荷や自身の健康への影響といった点を考える等「価格だけではない基準の獲得」などが挙げられた。

大学時における農林業・農山村体験では，農学部生と非農学部生では自身が学ぶべき内容は自ずと異なる。農学部生では，栽培技術などの農学を深める専門教育を強く意識する必要があるだろうが，非農学部生では，インターンシップ的な職業体験に加え，社会的・情意的教育としての普通教育的な側面も大きいと思われる。地域コミュニティへの貢献意欲や，農産物購入にあたっての環境配慮行動など，社会が快適に，持続的にあるために必要な要素を学んで獲得していた。

農林業・農山村の多面的機能の発揮は，農林業・農山村と一体に発揮されるため，それが衰退した場合に，機能もそれに伴い低下する。しかし，多面的な機能の内容について，国民全般に必ずしも十分に認識されておらず，農林業・農山村の衰退に伴う多面的機能発揮の低下についても，その懸念が十分に伝わっていない。そのような状態で，実際にわが国の農林業生産額の低下や，農山村の人口減少・高齢化にともなう農山村コミュニティの衰退や各種活動の縮小などが現実問題となっており，国民全般への農林業・農山村の多面的機能の理解の増進により，縮小する機能の歯止めをかける対策が必要である。

非農学部の大学生の農林業・農山村体験のような取り組みは，都市と農山村の間に人や物の流れが生まれるという点で，農林業・農山村にとって有益であるが，逆に農林業･農山村体験により農林業・農山村側が都市住民に提供し得る多面的機能には，特に「仕事を離れた部分での社会性の向上」や「価格だけではない基準の獲得」といった特徴があり，大学生本人や日本の社会全体にとっても有益なものである。このような相互交流の取り組みが広がっていくことを推進すべきであろう。

また，十分に比較検討をすることはできなかったが，農林業・農山村体験効果を発揮するために，Ｒ・Ｓ・Ｔグループの活動内容をまとめると，

（１）事前に訪問先の農家や地域の特産物等の勉強をし，農山村･農林業体験を準備している
（２）事前に顔見知りとなった学生たちで訪問することで，農山村到着後に学生間の自己紹介や関係作りが必要なく農家と学生たちの関係作りに専念できる
（３）受け入れ側の農林家では，なるべくお客様扱いせず，様々な農林家と引き合わせ，多くの時間を学生とのコミュニケーションに割いている

というようなやり方により，学生の農林業・農山村体験が単なる旅行ではなく教育的な効果を発揮していると考えられた。

学生は農林業・農山村体験後に必ずしも農林業・農山村関連の職業を選んでいるわけではないが，一度就職してから脱サラをして農林業・農山村関連の職業を選んだり，就職してからも学生の際に訪問した農林家とつながって農産物を購入したり，集落のお祭りの手伝いをしたりという関係が見られた。そのような事例の数々を見ると，農林業・農山村体験は，終わって１ヵ月後に効果が継続しているのみならず，各々の学生が卒業し様々な仕事を持つ社会人になってからの長い人生においても効果を継続的に発揮しているのではないかと思われた。

［引用文献］

Balling J. D. and Falk J. H.,(1982) “Development of Visual Preference for Natural Environments”, *Environment and Behavior*, 14(1),pp.5-28.

IISD (International Institute for Sustainable Development), (2013,) SUMMARY OF THE SECOND SESSION OF THE PLENARY OF THE INTERGOVERNMENTAL SCIENCE-POLICY PLATFORM ON BIODIVERSITY AND ECOSYSTEM SERVICES: 9-14 DECEMBER 2013, Online at http://www.iisd.ca/ipbes/ipbes2/, 2014.2.4.取得.

IPBES, (2013), THE CONTRIBUTION OF INDIGENOUS AND LOCAL KNOWLEDGE SYSTEMS TO IPBES: BUILDING SYNERGIES WITH SCIENCE, IPBES Expert Meeting Report, 9‐11 June 2013, Tokyo, Japan. Online at http://ipbes.net/events-feed/353-expert-workshop-on-indigenous-and-local-knowledge-systems-to-ipbes-2.html, 2014.2.4.取得.

Millennium Ecosystem Assessment(MA), (2005), Ecosystems and Human Well-being: Current State and Trends, edited by R. Hassan, R. Scholes and N. Ash, Island Press.

Millennium Ecosystem Assessment(MA), (2007), 生態系サービスと人類の将来―国連ミレニアムエコシステム評価, Millennium Ecosystem Assessment 編, 横浜国立大学21世紀COE翻訳委員会訳, オーム社, 東京.

OECD(経済協力開発機構), (2001), OECD リポート　農業の多面的機能, 農山漁村文化協会, 196pp

OECD(経済協力開発機構), (2004), OECD リポート　農業の多面的機能　―政策形成に向けて―, 家の光協会, 荘林幹太郎訳.

TEEB, (2008), 生態系と生物多様性の経済学　中間報告(The economics of ecosystems & biodiversity (TEEB)), 住友信託銀行／株式会社日本総合研究所／財団法人日本生態系協会翻訳／発行.

TEEB, (2010), MAINSTREAMING THE ECONOMICS OF NATURE: A SYNTHESIS OF THE APPROACH, CONCLUSIONS AND RECOMMENDATIONS OF TEEB, 公益財団法人地球環境戦略研究機関（IGES）訳.

會田 充志・石田 康幸（2003）「 栽培体験の教育的効果に関する一考察, 46-51p In 農業学習の教育効果に関する総合的研究, 日本農業教育学会。

阿部一博・堀内昭作（2003）「 大阪府立大学農学部附属農場における「農場実習」受講生の意識調査と教育効果」『日農教誌』,34(2),pp.59-69。

阿部山徹（2012）「大学生の農業体験活動に見る，農業・農村との関わり方～東京農工大学「耕地の会」を例として～」『 共済総研レポート』

阿部二郎・藤村敦（2003）　「農業教育の『訓育』的機能について―学校教育等における栽培活動を事例として―」『農業学習の教育効果に関する総合的研究』日本農業教育学会，pp.123-128。

板倉札実・中塚雅也・宇野雄一（2008）「大学生を対象とした農業体験学習の意義と課題 -神戸大学農学部の取り組みを事例として-」『神戸大学農業経済』40 巻，pp.33-40。

小田切徳美（2014）「 農山村は消滅しない」『岩波書店』。

尾川満宏・甲原定房（2015）「短期インターンシップの教育効果とは何か? : 参加学生を対象とした意識調査の分析から」。

楠奥繁則（2006）「自己効力論からみた大学生のインターンシップの効果に関する実証研究 ーベンチャー系企業へのインターンシップを対象にした調査」。

倉岡恭子・澤内大輔・山本康貴・桟敷孝浩・渡久地朝央（2009）「農業体験型修学旅行における農家対応と生徒行動の実態の分析」『北海道大学農経論叢』64，pp.105-111。

経済産業省 (2012) 成長する企業のためのインターンシップ活用ガイド　活用編。

経済産業省 (2012) 成長する企業のためのインターンシップ活用ガイド　基本編。

経済産業省 (2013) 教育的効果の高いインターンシップ実践のためのコーディネーターガイドブック。

経済産業省，特定非営利活動法人エティック（2014）教育的効果の高いインターンシップの普及に関する調査報告書。

呉宣児・無藤隆（1998）「自然観と自然体験が環境価値観に及ぼす影響」『環境教育』7(2), pp.2-13。

小林菜々恵・三島孔明,・藤井英二郎（2003）学外の稲作体験による児童の自然に対する感情・認識の変化 -松戸市こめっこクラブの場合-, 15-20p In 農業学習の教育効果に関する総合的研究, 日本農業教育学会

小林 菜々恵, 三島 孔明, 藤井 英二郎 (2003) 学外の稲作体験による児童の自然に対する感

情・認識の変化, 15-20pp in 農業学習の教育効果に関する総合的研究
小林洋介（2013）大学におけるインターンシップの 推進について，文部科学省高等教育局専門教育課企画官
小松崎　将一(2003) 農山村フィールドワーク体験による農業・環境学習， 105-110p In 農業学習の教育効果に関する総合的研究，日本農業教育学会
澤内大輔・倉岡恭子・桟敷孝浩・渡久地朝央・山本康貴(2009)農業体験型修学旅行に対する高校生の評価：農林業問題研究．45-1．pp.133-136.
島田薫（2006）「6ヶ月間のインターンシップの現状と問題点」
下平佳江・加藤麻樹（2009）「農業体験学習に参加する大学生と受入れ農家のニーズの違い」『長野県短期大学紀要』，64，pp.61-70。
荘林幹太郎（2003）「OECD 農業の多面的機能政策レポート　―いかなる場合にいかなる政策が必要か？―」『(財)日本農業土木総合研究所，東京』。
荘林幹太郎（2004）「先進国の農業環境政策と多面的機能」『青山学院大学WTOフォーラム資料』。
鈴村源太郎・中村敏郎（2010）「小学生を対象とした農林漁家宿泊体験の実態と効果」『2010 年度日本農業経済学会論文集』，pp.228-235。
鈴村源太郎・馬場範雪（2010）「行政対応特別研究資料　子どもを対象とした農林漁家宿泊体験による農山漁村振興の実態と課題」『農林水産政策研究所』。
千賀裕太郎（1997）「棚田の多面的機能とその保全」『地理』42(9)，pp.50-55。
多炭雅博・豊満幸雄・筒井義冨・池田大輔・山口智美（2009）「農村振興活動を通した大学専門教育の場としての農山村の価値－地域環境点検活動への参加を事例に－」『農村生活研究』第 53(1)，pp.2-11。
田中宣秀（2007）「高等教育機関におけるインターンシップの教育効果に関する一考察 ：新たな「意義」をみいだし，改めて「効果」を考える」。
飛田浩平（2008）「大学生のインターンシップの効果に関する実証的研究：近畿大学経営学部を事例として」。
内閣府（2005）「都市と農山漁村の共生・対流に関する世論調査」。
内閣府（2014）「農山漁村に関する世論調査」。
中塚雅也・鈴木曜・布施未恵子（2013）「大学と地域の連携による農体験学習活動の展開と課題」『農林業問題研究』191，pp.267-273。
日本学術会議（2001）「地球環境･人間生活に関わる農業及び森林の多面的な機能の評価について(答申)」。
日本経済団体連合会（2009）「効果的なインターンシップの要件」。
農業総合研究所「農業･農村の公益的機能の評価検討チーム」（1998）「代替法による農業･農村の公益的機能評価」『農業総合研究』52(4)，pp.113-138。
農林水産省農村振興局 都市農村交流課（2014）子ども農山漁村交流プロジェクトについて，http://www.maff.go.jp/j/nousin/kouryu/kodomo/pdf/kodomo.pdf
農林水産省（2014）「子ども農山漁村交流プロジェクト」

http://www.maff.go.jp/j/nousin/kouryu/kodomo/ （2016.2.10 取得）
農林水産省近畿農政局（2014）「農地等を活用した取組事例集（第 7 版）」。
農林水産省農村振興局都市農村交流課（2014b）「子ども農山漁村交流プロジェクトについて,」
http://www.maff.go.jp/j/nousin/kouryu/kodomo/pdf/kodomo.pdf （2014.2.20 取得）
農林水産政策研究所（2015）「子供農山漁村宿泊体験の現状と課題　－宿泊体験受入者の意向調査及び実態調査結果－」。
野田知子（2009）「農業体験修学旅行と子どもの食意識形成：実証　食農体験という場の力―食意識と生命認識の形成―」『農山漁村文化協会．東京』，pp.54-70。
野田知子（2014）「教育農場における食の生産についての学びの意義」『帝京大学教育学部紀要 2』，pp.207-216。
林直樹・杉山大志（2011）「農業の多面的機能の評価方法の問題点について」『 (財)電力中央研究所社会経済研究所』。
平野大昌（2010）「インターンシップと大学生の就業意識に関する実証研究」。
坊安恵・中村貴子（2013）「体験教育旅行における受入農家民泊の普及過程に関する研究」『農林業問題研究』191，pp.409-414。
宮川雅充・井勝久喜・諸岡浩子・廣田陽子・土生真弘・青山勲（2009）「環境配慮行動および社会活動の実践と子どもの頃との関連－岡山県の大学生を対象とした質問紙調査－」『吉備国際大学研究紀要』(19)，pp.37-46。
向山玉雄（2004）「農業体験学習の現状と課題」『農業教育資料』51，pp.4-6。
室田憲一・藤吉正明・北野忠・藤野裕弘・内田晴久（2005）「環境 NPO と連携した体験学習型環境教育の試み－農業体験事例報告－」『東海大学教養学部紀要』36，pp.1-11。
森島知子（2001）「農業・農村の教育的効果に関する研究－舞鶴市西方寺平農業小学校を事例にして－」『農業問題研究』141,pp.283-286。
文部科学省・厚生労働省・通商産業省（1997）「インターンシップの推進に当たっての基本的考え方」。
山田伊澄（2008）「農業・農村体験による子どもの気分状態変化に関する分析」『農業問題研究』170，pp.181-185。

付属資料．アンケート票

○○大学
事前アンケート

1．はじめに、あなたの学生番号等を教えてください。学生番号はこのアンケートと体験活動終了後に行うアンケートの照合にのみ利用します。

学生番号（　　）　学年（　　）年　性別（ 男　女 ）

2．あなたは今、誰かと一緒に住んでいますか？あてはまる項目に1つ○をつけてください。

（1）実家に家族と一緒に住んでいる　（2）兄弟姉妹だけで同居している
（3）友人と同居している　（4）アパートなどに一人暮らししている
（5）寮や下宿に住んでいる　（6）その他（　　）

3．農林業・農山村体験活動に参加する上で、あなたが特に期待しているものを、次の項目の中から<u>期待している順番に上から3つ</u>お答えください。

1. コミュニケーション能力を向上させたい
2. 学業に活かしたい
3. 学生時代にしかできないことをしたい
4. 新しいことに挑戦したい
5. 精神的に成長したい
6. 生き方を見つめ直したい
7. 都会とは違う生活を知りたい
8. 都会とは違う価値観を知りたい
9. 都会を離れたい
10. 未知の環境を経験したい
11. 食に関心がある
12. 田舎のおいしいものを食べたい
13. 農家・林業従事者の考え方を知りたい
14. 農林業に興味がある
15. 農山村に行きたい
16. 農山村に興味がある
17. 現地の人と交流したい
18. 民泊をしたい
19. 他の参加者と交流したい
20. 自然と触れあいたい
21. その他（　　）

最も期待していること（　　）　二番目に期待していること（　　）
三番目に期待していること（　　）

4．農林業・農山村体験活動によって、あなたはどのような成果が得られると思いますか。最も近いものに1つだけ○を付けてください。

①自身の視野が広がると思う

全く思わない 1 ― 思わない 2 ― あまり思わない 3 ― 少しそう思う 4 ― そう思う 5 ― 非常にそう思う 6

②自身の成長ができると思う

全く思わない 1 ― 思わない 2 ― あまり思わない 3 ― 少しそう思う 4 ― そう思う 5 ― 非常にそう思う 6

③大学で学んでいる専門分野の理解につながると思う

全く思わない 1 ― 思わない 2 ― あまり思わない 3 ― 少しそう思う 4 ― そう思う 5 ― 非常にそう思う 6

④将来の就職活動や就職先で役立つと思う

全く思わない 1 ― 思わない 2 ― あまり思わない 3 ― 少しそう思う 4 ― そう思う 5 ― 非常にそう思う 6

⑤農産物を作ったり木を育てる大変さがわかると思う

全く思わない 1 ― 思わない 2 ― あまり思わない 3 ― 少しそう思う 4 ― そう思う 5 ― 非常にそう思う 6

⑥農家や林業従事者が抱える農林業に関する悩みが理解できると思う

全く思わない 1 ― 思わない 2 ― あまり思わない 3 ― 少しそう思う 4 ― そう思う 5 ― 非常にそう思う 6

次のページに続きます。→

⑦自身の生活と農林業・自然との結びつきが理解できると思う

全く思わない 1 ― 思わない 2 ― あまり思わない 3 ― 少しそう思う 4 ― そう思う 5 ― 非常にそう思う 6

⑧訪問先に魅力を感じると思う

全く思わない 1 ― 思わない 2 ― あまり思わない 3 ― 少しそう思う 4 ― そう思う 5 ― 非常にそう思う 6

5．以下の項目について、今のあなたの考え方に最も近いものに1つだけ○をつけてください。

（1）仕事・生活への考え方について

①物事に無心になって取り組むことは大切だと思う

全く思わない 1 ― 思わない 2 ― あまり思わない 3 ― 少しそう思う 4 ― そう思う 5 ― 非常にそう思う 6

②様々な世代の人との交流を通じ、地域コミュニティを支えることは重要だと思う

全く思わない 1 ― 思わない 2 ― あまり思わない 3 ― 少しそう思う 4 ― そう思う 5 ― 非常にそう思う 6

③スマホやインターネットがなければ生活できない

全く思わない 1 ― 思わない 2 ― あまり思わない 3 ― 少しそう思う 4 ― そう思う 5 ― 非常にそう思う 6

④幸せは農山村よりも都市にいることで実感できると思う

全く思わない 1 ― 思わない 2 ― あまり思わない 3 ― 少しそう思う 4 ― そう思う 5 ― 非常にそう思う 6

⑤幸せは物を持つことで実感できると思う

全く思わない 1 ― 思わない 2 ― あまり思わない 3 ― 少しそう思う 4 ― そう思う 5 ― 非常にそう思う 6

⑥幸せは人とのつながりで実感できると思う

全く思わない 1 ― 思わない 2 ― あまり思わない 3 ― 少しそう思う 4 ― そう思う 5 ― 非常にそう思う 6

⑦誇りを持てる仕事に就きたいと思う

全く思わない 1 ― 思わない 2 ― あまり思わない 3 ― 少しそう思う 4 ― そう思う 5 ― 非常にそう思う 6

⑧仕事を通じて、他人の生活を豊かにしたいと思う

全く思わない 1 ― 思わない 2 ― あまり思わない 3 ― 少しそう思う 4 ― そう思う 5 ― 非常にそう思う 6

⑨工夫して仕事をすると、つまらないと思ったことも楽しくなると思う

全く思わない 1 ― 思わない 2 ― あまり思わない 3 ― 少しそう思う 4 ― そう思う 5 ― 非常にそう思う 6

⑩地道な仕事の積み重ねが、大きな成果に結びつくと思う

全く思わない 1 ― 思わない 2 ― あまり思わない 3 ― 少しそう思う 4 ― そう思う 5 ― 非常にそう思う 6

次のページに続きます。→

⑪自分と異なる価値観を認められれば、自分の考え方が広がると思う

全く思わない 1 ― 思わない 2 ― あまり思わない 3 ― 少しそう思う 4 ― そう思う 5 ― 非常にそう思う 6

⑫仕事はその過程（プロセス）にも楽しさがあると思う

全く思わない 1 ― 思わない 2 ― あまり思わない 3 ― 少しそう思う 4 ― そう思う 5 ― 非常にそう思う 6

⑬自分のやりたい仕事ができなければ意欲がわかない

全く思わない 1 ― 思わない 2 ― あまり思わない 3 ― 少しそう思う 4 ― そう思う 5 ― 非常にそう思う 6

（2）農林業・農山村への考え方について

①農家・林業従事者になりたい

全く思わない 1 ― 思わない 2 ― あまり思わない 3 ― 少しそう思う 4 ― そう思う 5 ― 非常にそう思う 6

②農林業にかかわる仕事に就きたい

全く思わない 1 ― 思わない 2 ― あまり思わない 3 ― 少しそう思う 4 ― そう思う 5 ― 非常にそう思う 6

③農林業・農山村に役立つ活動をしたい

全く思わない 1 ― 思わない 2 ― あまり思わない 3 ― 少しそう思う 4 ― そう思う 5 ― 非常にそう思う 6

④食料・農林業・農山村に関する知識を得たい

全く思わない 1 ― 思わない 2 ― あまり思わない 3 ― 少しそう思う 4 ― そう思う 5 ― 非常にそう思う 6

⑤農薬や化学肥料を使っていない農産物を食べたい

全く思わない 1 ― 思わない 2 ― あまり思わない 3 ― 少しそう思う 4 ― そう思う 5 ― 非常にそう思う 6

⑥食料や木製品を買うときは、価格以外にも検討すべきことがあると思う

全く思わない 1 ― 思わない 2 ― あまり思わない 3 ― 少しそう思う 4 ― そう思う 5 ― 非常にそう思う 6

⑦食料や木材はなるべく国内で自給した方がよいと思う

全く思わない 1 ― 思わない 2 ― あまり思わない 3 ― 少しそう思う 4 ― そう思う 5 ― 非常にそう思う 6

⑧農林業と自然環境は共生できると思う

全く思わない 1 ― 思わない 2 ― あまり思わない 3 ― 少しそう思う 4 ― そう思う 5 ― 非常にそう思う 6

⑨日本の農業生産・林業生産は必要であると思う

全く思わない 1 ― 思わない 2 ― あまり思わない 3 ― 少しそう思う 4 ― そう思う 5 ― 非常にそう思う 6

次のページに続きます。→

⑩日本の農林業は農山村コミュニティと強く結び付いていると思う

全く思わない	思わない	あまり思わない	少しそう思う	そう思う	非常にそう思う
1	2	3	4	5	6

⑪日本の農山村は必要であると思う

全く思わない	思わない	あまり思わない	少しそう思う	そう思う	非常にそう思う
1	2	3	4	5	6

6. あなたの出身地と現在の居住地を市町村区名でお答えください。

出身地　（　　）都・道・府・県　（　　）市・町・村・区

出身地の周辺はどのようなところですか。最も近いものを1つだけお答えください。

（1）繁華街に近い商業地域　（2）事務所などが多いオフィス街
（3）住宅が密集する住宅地域　（4）工場が多い工業地域
（5）畑や水田が広がる平野の農業地域　（6）里山のある丘陵農業地帯
（7）山あいに畑や田んぼがある農業地域　（8）山奥の集落
（9）海沿いの漁村地域　（10）その他（　　）

現在の居住地　（　　）都・道・府・県　（　　）市・町・村・区

現在の居住地の周辺はどのようなところですか。最も近いものを1つだけお答えください。

（1）繁華街に近い商業地域　（2）事務所などが多いオフィス街
（3）住宅が密集する住宅地域　（4）工場が多い工業地域
（5）畑や水田が広がる平野の農業地域　（6）その他（　　）

7. あなたは過去に田植えや収穫といった農作業や林業作業をしたことはありますか。あてはまるもの全てに○をつけてください。

（1）幼稚園・保育園・小学校のときの体験学習・授業でやった
（2）中学校・高校のときの体験学習・授業でやった
（3）立教大学の農業/林業体験プログラムに参加した
（4）上記以外で、大学の農林業体験プログラムに参加した
（5）実家や自宅の家庭菜園をやった（やっている）
（6）農家である実家や親戚宅で農作業を手伝った（手伝っている）
（7）農作業・林業作業はやったことがない
（8）その他（　　）

8. あなたは過去にどのくらい農業や林業に関して勉強や情報収集をしていましたか。当てはまるもの全てに○をつけてください。

（1）独学で本などを読んで勉強した　（2）セミナーなどに参加した
（3）サークル活動などで勉強や情報収集をした　（4）友人同士の会話でよく話題にした
（5）知人や親戚から話を聞いた　（6）インターネットなどで情報収集した
（7）テレビのニュースなどを見る程度　（8）ほとんど勉強や情報収集はしたことがない
（9）その他（　　）

9. あなたの身近に、農林業に関わっている人がいますか。あてはまるもの全てに○をつけてください。

（1）両親・兄弟姉妹　（2）祖父母・親戚
（3）近所の住人　（4）友人・知人
（5）いない
（6）その他（　　）

次のページに続きます。→

10. もし今回の体験活動や、食料、農林業、農山村などのことで、期待すること、気になることなどがありましたら、以下の欄にお書きください。

11. 将来どのような職業に就きたいですか、○で囲ってください（複数回答可）。

1. エンターテイメント	2. クリエイティブ	3. 美容・ファッション
4. コンピュータ	5. サービス	6. 建築・インテリア
7. 旅行	8. 出版	9. モノづくり
10. 乗り物	11. インフラ整備	12. 医療・健康・福祉
13. 冠婚葬祭	14. 国や地域に貢献	15. 海外貢献
16. 自然・動物	17. 食・料理	18. 語学・教育
19. 資産・金融	20. 農林水産業	21. その他（

アンケートは以上で終わりです。ご協力、誠にありがとうございました。